

古墳時代における鏡の分配と保有

Distribution and Possession of Mirrors in the Kofun Period

上野祥史

UENO Yoshifumi

はじめに

①古墳時代政治構造と鏡の流通・分配

②4つの時間相で整理した鏡の流通論

③倭鏡と対照した中国鏡の評価

④盤龍鏡の検討

おわりに

【論文要旨】

古墳時代に副葬した鏡は、古墳時代社会の政治構造を究明する重要な資料の一つである。

製作・入手時期と副葬時期を隔てた保有鏡が少なくないため、長期保有鏡の解釈は政治関係や社会体制の議論に大きな影響を与える。ことに、製作時期と副葬時期が隔たる中国鏡ではそれが顕著である。本論では、鏡の分配時期を認識するプロセスを整理し、中国鏡にも倭鏡にも適応が可能な、生産現象にも副葬現象とも整合する理解の構築を目指した。

まず、古墳に副葬した中国鏡と倭鏡を対象に、鏡にみる4つの時間相を整理し、分配時期の抽出プロセスを比較検討した。分析において副葬時期のもつ意味・意義が大きいことを改めて確認し、鏡の分配は、製作・入手時期に対応した分配を主体としつつ、一部が長期にわたり分配を継続するという理解モデルを提示した。

その理解モデルを、倭鏡の創出における中国鏡の保有と、主題を共有する中国鏡と倭鏡の副葬推移の比較という、二つの視点を重ねて検証した。模倣の対象という視点から、中国鏡の入手時期・分配時期の定点が与えられることを示し、同じ主題を共有する中国鏡と倭鏡の相互関係を検討した。盤龍鏡を対象とした分析では、両者が相互に補完しつつ、長期にわたり副葬を継続したことを示した。

製作・入手時期と対応する短期分配を中心としつつも一部は保有を継続し分配に供したという、鏡分配の理解モデルを検証し、分配主体による保有の継続は、分配の継続を目的とするだけではなく、分配主体も器物を保有する「分有」の性格を帯びた分配故の、本質的なものであることを指摘した。鏡の長期分配を認めうることから、分配論に基づく政治秩序の変動を、継続性の視点から展望した。

【キーワード】 鏡, 長期保有, 分配, 分有, 中国鏡, 倭鏡

はじめに

古墳時代には、象徴性を帯びた器物が流通し、政治的関係を表象する機能を担った。これらの器物に注目した威信財論は、古墳時代の政治構造研究を大きく進展させた。流通の実態がより詳細に解明され、同質化と差異化を内包した分配戦略に、倭王権の特質と限界が指摘されている。古墳時代に副葬した鏡には、製作・入手時期と副葬時期を隔てた保有鏡の存在が少なくない。古墳時代に流通した器物を長期保有する例は少なく、鏡に特徴的な現象であるといえよう。そのため、長期保有鏡は古くから議論の対象となり、現在においてもその重要な議論の一つである。しかし、製作動向を重視する論と副葬現象を重視する論では分配時期の認識が異なり、長期保有鏡の解釈の違いが、異なる政治関係や社会体制を提起しているのが現状である。鏡の分配時期を認識するプロセスを整理し、製作動向にも副葬現象にも対応した分配の理解を構築することが必要なのである。

①……………古墳時代政治構造と鏡の流通・分配

鏡の生産論と流通論 古墳時代の鏡を政治的視点で評価する試みは小林行雄に始まる〔小林1952・1955・1956・1957・1961〕。小林は、伝世鏡論と同範鏡論を以て、古墳時代社会の成立・確立を説いた。三角縁神獣鏡が近畿地方に集中し、保有に格差があり明確な中核地域をもつ状況に、政治性を強く反映した分配を読み解き、求心性を備えた政治機構の成立を指摘したのである。器物を媒介とした分配主体と受領者との関係は、政治機構を主導する中心的存在と各地の地域首長との関係として理解され、以後は古墳時代の政治構造研究を検討する枠組みの一つとして定着する。三角縁神獣鏡とそれに継続する古墳時代倭鏡（以下では「倭鏡」と表現する）を対象とした検討は、威信財システムとして理論的な解釈へと昇華するに至っている〔福永2005a, 辻田2006・2007b, 下垣2011等〕。

鏡の流通・分配論は、当初器物の同伴関係が設定する長い時間幅に基づいたが〔小林1957, 川西1981・1983・1986・1988等〕、型式学的研究の進展により製作年代・製作段階が確立すると、より細かな時間幅での議論が深化した。岡村秀典による漢鏡編年、岸本直文や新納泉による三角縁神獣鏡編年、森下章司の倭鏡編年など、1990年を前後する時期に鏡の生産論は飛躍的に進展した〔岡村1984・1993, 岸本1989, 新納1991, 森下1991等〕。中国鏡も倭鏡もともに、精緻な型式分類とそれを体系化した様式という、ミクロな方向性とマクロな方向性を兼ね備えて、製作年代の認識が深まったのである。古墳への副葬年代ではなく、製作年代により鏡の流通を議論する道が拓かれたのである。しかし、いずれの鏡においても生産論を反映した流通論が一様に展開したわけではない。古墳時代に副葬した鏡には、漢鏡、三国西晋鏡、南北朝鏡の中国鏡と倭鏡があるが、三角縁神獣鏡・倭鏡とその他の中国鏡は対照をなしたのである。

三角縁神獣鏡と倭鏡 三角縁神獣鏡と倭鏡の研究は、この20年の間に飛躍的に進展した。三角縁神獣鏡は、舶載鏡（前半段階）を3・4段階に区分し、倭製鏡（後半段階）を3・4段階に区分する認識が共有されている〔岸本1989・2013, 福永1994・1996・2005a, 森下1998b, 岩本2003・2008,

辻田 2007b]。細部には差異があるものの大枠は共通している。倭鏡は、古墳時代を通じて3つの様式に分けることができるが[森下 1991, 上野 2009], 筆者が第1期倭鏡と呼ぶ古墳時代前期に生産の始まる倭鏡は、6段階に製作が区分されている⁽¹⁾[下垣 2003ab・2011]。三角縁神獸鏡でも倭鏡でも、製作段階が同じあるいは近接する諸鏡が共伴する事例が多い。製作段階を反映して副葬が進行することから、分配(流通)は製作と連動したと認識されている[福永 2005a, 下垣 2003a・2011]。こうした認識を背景に、型式あるいは製作段階ごとの分布を検討して、王権中枢による器物を媒介とした連携戦略が詳述されている[福永 2005ab, 下垣 2003b・2004・2011, 岩本 2010]。古墳時代前期には、規格品である三角縁神獸鏡で表現した量差の序列から、大小の形態をつくり分けた倭鏡で表現する質差と量差の序列へと変化したことが指摘されており、変化の方向性は概ね共通の認識となっている[下垣 2003ab・2011]。

中国鏡 中国鏡でも、漢鏡の様式編年の確立、三国西晋鏡と南北朝鏡の抽出、各個別鏡式での型式分類など、生産論の深化はめざましい[岡村 1984・1993・1999, 西村 1983, 森下 1998b, 車崎 2001・2002ab・2008, 上野 2000・2007]。しかし、三角縁神獸鏡や倭鏡とは異なり、中国鏡を対象とした流通論は低調であった。中国鏡では、日本列島外からの入手と日本列島内での分配という2つの流通を整理するの必要があり、古墳出土の中国鏡に対しては、生産論の成果を直接反映することが困難であった為である。

その中で、漢鏡の生産論が大きく関与したのは、古墳時代に鏡流通・分配システムが確立する過程に対する議論である。漢鏡は弥生時代から日本列島へ流入しており、漢鏡の製作段階を反映して出土鏡の様相が変化することから、漢鏡の製作時期と日本列島への流入時期を同一視した議論が組み立てられた。漢鏡の製作時期ごとに分布が検討され、北部九州を中心とした弥生時代の流通形態から近畿を中心とした古墳時代の流通形態への転換が、2世紀後半に製作した画文帯神獸鏡や上方作系浮彫式獸帯鏡を画期とすることが指摘されたのである[岡村 1999, 福永 2001・2005ab]。しかし、同じ鏡式であることが日本列島への流入時期の同時性を保証するとは限らない。古くは、小林行雄が伝世鏡論を主張する一方で、古墳時代前期後半段階に中国鏡を新たに入手することを想定しており[小林 1957], 近年でも、画文帯神獸鏡と三角縁神獸鏡を精力的に整理する福永伸哉は、三角縁神獸鏡に先行した画文帯神獸鏡の流入を画期としつつ、古墳時代における神獸鏡の流入も認めている[福永 2005ab]。同じ鏡にも長期保有鏡と当世流通鏡が混在することとなり、鏡式の視点で流入時期を弁別することは困難である。製作と流入の連動に懐疑的で、流入時期を副葬時期に近接させ、画文帯神獸鏡の流入段階を設定しない見解にも理はある[辻田 2005・2007ab]。遺物を重視した流通=入手・分配の理解と、遺構を重視した流通=入手・分配の理解は、その肯否定が容易ではない[上野 2011a]。

一方で、古墳に副葬した漢鏡の分布を比較する検討も進んでいる[辻田 2001・2007ab, 下垣 2013a]。古墳出土の方格規矩四神鏡や内行花紋鏡が近畿地方に集中して分布し、その形態が古墳時代に流通したことが確実な三角縁神獸鏡や倭鏡の分布と相関することから、これらの漢鏡が古墳時代に流通したと理解するものである。もし、分布形態で古墳時代の鏡流通システムを認識するのであれば、画文帯神獸鏡も同じ範疇で考えるべきである。分布形態による流通時期の弁別は、画文帯神獸鏡を三角縁神獸鏡に先行した段階として認める論理的根拠を失うことにもなる。もし、画文帯

神獸鏡の段階を認めるのであれば、他の漢鏡もあわせて、製作時期を反映して流通時期を理解する方がまだ整合的である〔岡村1999, 岸本2004・2014⁽²⁾〕。

このように、入手・分配という流通時期が確定できないため、分布形態という副葬の現象のみが検討対象となるところに、漢鏡の流通論は限界がある。

漢鏡以外では、三国西晋鏡や、南北朝鏡を対象として、古墳時代の流通に関する検討が進みつつある。三国西晋鏡の双頭龍紋鏡や方格規矩鏡, 南北朝鏡の同型鏡群などを対象とした研究である〔西村1983, 東1990・1992, 川西1992・1993ab・2000・2004, 森下1998b, 車崎2001・2002ab, 下垣2011, 上野2013a〕, いずれも鏡式あるいは鏡群を一括して副葬の推移や分布の形態を検討するものであり、三角縁神獸鏡や第1期倭鏡のように型式別・製作段階別の流通を議論するまでには至っていない。

生産論（生産段階）を反映した流通論が展開しているか否かにより、三角縁神獸鏡・第1期倭鏡と中国鏡は対照的である。型式・製作段階を反映できず、鏡式を一括した集積的視点で分布を検討する限界こそ、古墳時代の中国鏡の流通論が低調な所以である。

②……………4つの時間相で整理した鏡の流通論

1 既存の議論と4つの時間相

鏡の4つの時間相 一般論として、鏡を製作してから副葬するまでに、「製作時期」「流通時期」「副葬時期」という3つの時間相が存在する。古墳に副葬した鏡の多くは分配主体を核とした流通を想定しているので、「流通時期」は、分配主体が「入手した時期」と、分配主体が「分配した時期」に分かれる。中国鏡の場合、入手時期は日本列島外からの流通時期を示し、分配時期は日本列島内での流通時期を示すことになる。中国鏡でも分配主体を介さない流通（個別入手）を想定するのであれば、流通時期は入手時期のみの単相となる。倭鏡の場合は、生産主体と分配主体が同じであるため、製作時期と入手時期は同一である。各時期の間に隔たりがあれば、保有が発生したことになる。理論的には、保有期間は製作時期と入手時期の間と、入手時期と分配時期の間と、分配時期と副葬期の間との3つの次元で発生する可能性がある。

このような「製作時期」「入手時期」「分配時期」「副葬時期」という4つの時間相で鏡の流通を検討することの重要性は指摘されているが〔辻田2007b, 上野2013b〕, 長期保有の顕著な中国鏡のみならず、倭鏡についても同じ視点・基準で整理すべきだと考える。以下では、中国鏡と倭鏡の流通において、製作時期－入手時期－分配時期－副葬時期という4つの時間相が如何に認識されているのかを整理し、分配をどのように理解できるのかを検討することにした（表1）。分配時期こそ、鏡の流通すなわち器物を媒介とした王権中枢の連携戦略を考える上で重要な項目であり、分配時期の長短は器物の流通システムと政権構造の解釈にも影響するからである。

漢鏡（前漢鏡・後漢鏡） 漢鏡は古墳時代以前に生産が終了しており、製作時期と副葬時期は重なりをもたない。古墳時代前期初葉（3世紀中葉）に副葬がはじまり、中期・後期（5・6世紀）に至るまで継続する。中期後葉以降に副葬する漢鏡には、後述する南北朝鏡との判別が難しいものも含まれる。前期初葉から中期中葉までに副葬する漢鏡に対しては、2つの理解が併存している。

一つは、日本列島へ流入した時期（入手時期）を鏡の製作時期に求め、入手した各地域社会が保有を継続したのち、古墳時代に副葬したとみる見解である。小林行雄の伝世鏡論や、岡村秀典の漢鏡編年を入手時期に対応させた諸論である〔小林 1955・1961, 川西 1975・1989, 岡村 1986・1999, 福永 1999ab・2005ab・2008a・2012, 岸本 2004・2010・2014, 上野 2012ab・2014〕。この場合には、日本列島内部での流通に古墳時代の分配主体は関与しないため、分配時期が存在しない。副葬時期の違いは、鏡を保有する地域社会の事情で説明している。

いま一つは、日本列島へ流入した時期（入手時期）を古墳時代以後に求め、入手時期と分配時期を副葬時期に近接させて理解するものである〔森 1962・1978, 高橋 1986, 辻田 2001・2007ab, 鈴木 2010, 下垣 2013a, 岩本 2014b〕。この場合、中国鏡の入手を対中国交渉が展開した期間に限るため⁽³⁾、入手時期は3世紀代に絞り込まれる。3世紀（前期前葉）の副葬には、入手時期と分配時期と副葬時期を近接させた理解が可能であるが、4世紀（前期中葉）以降の副葬には保有期間が発生するため、分配時期を入手時期に近接させる理解か、分配時期と副葬時期を近接させる理解により、保有期間を説明せねばならない。分配時期について明確に言及した論は少ないが、分配時期を入手時期に近接させた理解であれば、副葬時期の違いは保有する地域社会の事情を反映することになり、第1の理解と同じ論理をもつことになる。

なお、両者を折衷した意見として、弥生時代に日本列島へ流入した鏡が、古墳時代に王権中枢によって各地から吸収され再分配の対象となった可能性も指摘されている〔下垣 2013a〕。これは、分配時期を副葬時期に近接させる理解の一つといえよう。

三国西晋鏡 方格規矩鏡や内行花紋鏡、あるいは双頭龍紋鏡など、漢鏡を模倣した3世紀の創作模倣鏡である。古墳出土鏡では、方格規矩鏡（模倣方格規矩鏡・方格T字文鏡）と双頭龍紋鏡（位至三公鏡）を確実な例として認識できる。方格規矩鏡は4段階に型式分類が可能であり、古墳時代前期から中期にかけて副葬が継続する〔松浦 1994, 森下 1998b, 車崎 2001〕。森下章司の分類に従えば、甲群は前期前葉、乙群は前期中葉、丙・丁類は前期後葉というように、おおむね型式変遷と副葬の開始時期には対応がみえる。甲群は3世紀の中国出土資料にも類例をみるが、乙・丙・丁群は出土事例がなく、乙群以下の製作時期は確定できない。中国鏡であるため入手時期を3世紀に限れば、4世紀（前期中葉）以後の副葬には保有期間が発生することになる〔車崎 1999a・2001, 森下 1998b, 上野 2009・2011b・2013b, 岡村 2011, 辻田 2014〕。先の漢鏡に対する第2の理解と同じく、分配時期を入手時期に近接させた理解か、もしくは分配時期と副葬時期を近接させた理解が必要となる。製作順序（型式変遷）に従い副葬が推移するため、いずれの理解にも無理が生じることになる。もし、分配時期と入手時期が近接するのであれば、入手・分配が完了して間をおかない4世紀の早い段階（前期中後葉）に丙丁群などの後出型式を副葬することや、多様な型式が一時期に混在する様相がみえてもよい。しかし、現実にはそうした例はない。分配時期を副葬時期に近接するのであれば、3世紀の間に甲群から丁群を入手し、古相の鏡より順次分配を進めて、その分配が中期後半にまで及ぶことになる。その状況を模式図で表現すれば、前者では新相の鏡を分配している時期に古相の鏡のみを副葬する時期を認めることになり、後者では分配主体が新相の鏡を入手する時期に古相の鏡のみを配する時期を認めることになり、論理に無理が生じることになる（図1）。4世紀の流入を否定せずに、分配時期を入手時期に近接させた理解は〔森下 1998b〕、それを調和するものといえよ

表1 古墳出土鏡と鏡の4つの時間相

鏡	製作時期と副葬時期の関係	4つの時間相の関係	主張論者	
中国鏡	漢鏡(前漢鏡・後漢鏡)	製作 = 入手 / 副葬	小林行雄・川西宏幸・岡村秀典・福永伸哉・岸本直文・上野祥史	
		製作 / 入手 = 分配 ≤ 副葬	小林行雄・森浩一・高橋徹・鈴木一有・辻田淳一郎・岩本崇	
	三国西晋鏡	製作 < 副葬	製作 = 入手 = 分配 < 副葬	森下章司・車崎正彦・岡村秀典・上野祥史
		製作 / 副葬	製作 = 入手 < 分配 = 副葬	—
	三角縁神獸鏡(長期編年)	製作 ≤ 副葬	製作 / 入手 = 分配 = 副葬	東潮
	三角縁神獸鏡(短期編年)	製作 < 副葬	製作 = 入手 = 分配 < 副葬	岸本直文・福永伸哉・森下章司・辻田淳一郎・岩本崇・(下垣仁志)
			製作 = 入手 < 分配 = 副葬	岡村秀典・車崎正彦・(下垣仁志)
	三角縁神獸鏡	製作 / 入手 < 副葬	製作 / 入手 < 分配 = 副葬	田中晋作・上野祥史
	南北朝鏡(同型鏡群)	製作 / 入手 < 副葬	製作 / 入手 = 分配 < 副葬	川西宏幸・車崎正彦・岡村秀典・上野祥史
			製作 / 入手 < 分配 = 副葬	福永伸哉・高松雅文・辻田淳一郎・上野祥史
南北朝鏡(同型鏡群以外)		製作 / 入手 = 分配 = 副葬	川西宏幸・上野祥史・辻田淳一郎	
倭鏡	倭鏡(古墳時代倭鏡)	製作 ≤ 副葬	製作 = 入手 = 分配 ≤ 副葬	森下章司・下垣仁志・上野祥史
			製作 = 入手 ≤ 分配 = 副葬	辻田淳一郎・加藤一郎・上野祥史

∕ : 前後の時期の関係が不明 = : 前後の時期が同一・近接
 < : 前後の時期に隔たりがある ≤ : 前後の時期が同一・近接するものが大半で一部に隔たりのあるものを含む

う。3世紀に限定した入手という前提を問いなおすのであれば、中国での出土をみない乙・丙・丁群を倭製として、各型式の製作と入手と分配と副葬を同じ時間幅でとらえられ、無理のない理解を提示できる可能性も拓ける。

双頭龍紋鏡では、細線で龍体を表現するⅢ式が魏晋以後の墓からの出土に限られ、その製作時期は3世紀以降に求められる〔西村1983〕。4世紀の中国における鏡生産の実態が不明のため、製作時期の下限は確定できない〔上野2013b〕。日本列島の双頭龍紋鏡Ⅲ式は、中期(4世紀後葉～5世紀後葉)に副葬する事例が多く、製作時期と副葬時期は重なりをもたない。入手時期を中国交渉が展開した3世紀に限定する理解と〔車崎2008, 岡村2011〕、3世紀に限定しない理解が併存する〔東1990・1992, 森下1998b〕。製作時期と入手時期を同一視し、対中国交渉が空白の4世紀より前に入手した前提に立てば、入手時期と副葬時期は隔たることになる。地域社会では副葬せずに中期まで保有を継続したか、分配主体が入手した鏡を保有し続けて中期前後に分配を始めたかの理解が必要となり、上述の方格規矩鏡と同じ無理のある理解となる(図1)。入手時期を3世紀に限定しない理解では、4世紀後葉の対百済交渉や5世紀の対南朝交渉により双頭龍紋鏡を入手したとの指摘もみえる〔東1990・1992〕。入手時期と分配時期を副葬時期に近接させ、それに合致した入手経緯を社会情勢で説明したものである⁽⁴⁾。

なお、唐草紋鏡(芝草紋鏡)(兵庫県一王山十善寺古墳, 福岡県金屎古墳出土鏡等)あるいは八乳神獸鏡(徳島県巽山古墳出土鏡等)なども、前期後葉から中期前葉に副葬する傾向がある。方格規矩鏡や双頭龍紋鏡と同じ状況がみえるのである。

三国西晋鏡は、製作順序(型式変遷)に従い副葬が進行するものの、入手時期・分配時期の抽出が難しいため、いずれの理解にも無理を含むことになると指摘しておきたい。

三角縁神獸鏡 三角縁神獸鏡は、創作模倣鏡の特徴を備えており、三国西晋鏡の様式に含まれる鏡である。三角縁神獸鏡の副葬は古墳時代初葉（3世紀中葉）に始まり、もっとも後出の型式が前期末葉・中期初葉（4世紀後葉）の古墳から出土している。製作段階が同じ或いは近接する諸鏡が共伴する事例は多く、概ね型式変遷を反映して副葬が推移している。しかし、製作期間の長短により、長期編年と短期編年に見解が分かれる。

製作と副葬との対応関係を重視して、製作時期と副葬時期を同じ時間幅で理解するのが長期編年の立場である。[岸本 1995・2013, 福永 1994・1996・2005a, 森下 1991・1998a, 岩本 2003・2005・2008, 辻田 2007b]。製作時期が4世紀後葉（前期末葉）にまで及ぶため、前半段階の3世紀の三角縁神獸鏡を中国鏡としてとらえ、後半段階の4世紀の三角縁神獸鏡を倭鏡としてとらえる。製作段階が同じ或いは近接する諸鏡が共伴する事例が多いことを根拠に、製作と入手と分配と副葬とが一連で進行し、保有期間が発生することは少ないと理解する [森下 1991, 福永 1994・1996・2005a, 下垣 2003a・2011, 岩本 2003・2005]⁽⁵⁾。分配時期と副葬時期を対応させた理解であり、中期以降に副葬する事例は、副葬時期が分配時期と隔たるものとして理解することになる。

それに対して、三角縁神獸鏡の分配が中期にまで継続するという、分配時期を副葬時期に近接させた理解も提示されている。前期の分配器物である三角縁神獸鏡と中期の分配器物である帯金式甲冑との共伴関係に注目し、両者を時間的先後関係だけで理解するのではなく、同時期の系譜差（分配主体の差）として理解するものである [田中 1993・2001・2005・2008・2012・2013・2014]。この長期分配に対しては批判的な意見が多いが [福永 1998, 森下 1998, 上野 2012a], いずれも副葬時期と分配時期を近接させるという本質は同じであることを指摘しておきたい。筆者も、製作時期とは異なる価値を付与して分配するのであれば、長期分配の可能性あることを示唆した [上野 2015b]。

一方、製作の連続性を重視して、すべてを舶載品として理解するのが短期編年の立場である。魏晋王朝への遣使と製作段階を対応させて、3世紀末までにすべての三角縁神獸鏡を入手したと理解するものである [岡村 1996・2011, 車崎 1999・2000・2001・2008, 下垣 2011]。入手を3世紀に限定するため、入手時期と副葬時期には大きな隔たりが生じる。分配時期を入手時期に近接させた理解か、分配時期を副葬時期に近接させた理解が必要になる。製作順序を反映して副葬が推移するため、

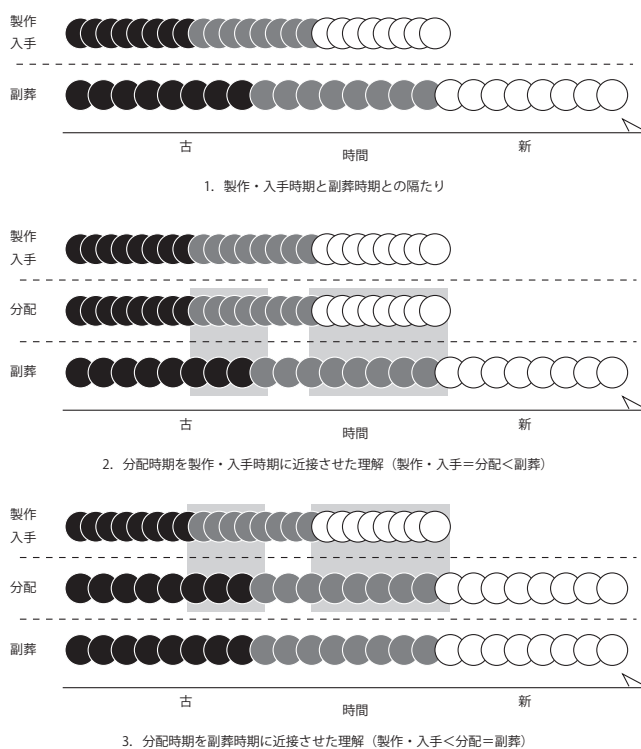


図1 分配時期の抽出と不整合なモデル

製作時期・入手時期と副葬時期の隔たりは、分配時期を長期にみても短期にみても、少し無理を強いた理解となることは、三国西晋鏡の方格規矩鏡と同じである(図1)。三角縁神獸鏡をすべて三国西晋鏡に含めて考えれば、三角縁神獸鏡と方格規矩鏡の退化型式は同じ製作時期が想定できるものの、副葬時期が異なることに注意が必要であろう。

三角縁神獸鏡では、製作順序(型式変遷)に従い副葬が推移するものの、入手時期・分配時期の抽出が難しく、いずれの理解でも無理が生じることは三国西晋鏡と同じであるといえよう。しかし、製作段階が同じ或いは近接する諸鏡が共伴する事例が多く、それを積極的根拠とした長期編年の理解は整合性を備えているとえよう。

倭鏡 倭鏡は、製作時期の違いにより3つに区分することが可能である。前期中葉から中期前葉にかけての第1期倭鏡、前期中葉の第2期倭鏡、中期後葉から後期にかけての第3期倭鏡である(註1参照)。倭鏡では生産主体と分配主体を同じとみるので、入手時期が製作時期と同一である。

第1期倭鏡は、三角縁神獸鏡と同じく、同一あるいは近接する製作時期の鏡が共伴することが多いため、分配時期を製作時期と近接してとらえる。ことに、連作鏡と呼ぶ製作時期・製作環境の近さを推定できる酷似した一群の鏡が、一括して取り扱われる傾向のあることや、鏡と鏡以外の器物との共伴関係に注目して、製作時期と分配時期が対応することが強調されている[下垣2005b・2011]。そのため、中期前葉以降に副葬する事例に対しては、副葬時期を分配時期と隔てて理解することになる[森下1998b, 下垣2011, 上野2012a]。

一方、福岡県丸隈山古墳出土鏡、岡山県千足古墳や宮崎県西都原古墳群の出土鏡、埼玉県長坂聖天塚古墳出土鏡の検討において、共伴器物や地域社会の動向から、各地域での保有を想定することが難しく、分配時期と副葬時期を近接させた理解が提示されている[辻田2007b・2014, 加藤2015ab, 上野2016]。また、後期に副葬する前期倭鏡(第1期倭鏡)が相当数あり、後期倭鏡(第3期倭鏡)と共伴する前期倭鏡(第1期倭鏡)を含むことから、分配時期を副葬時期と同一とする可能性も指摘されている[加藤2015c]。これらは、製作と分配と副葬が同一の時間幅の中で進行しない例も倭鏡にはあることを示すものである。

第3期倭鏡については、体系的な整理が進みつつあるなかで、珠紋鏡の検討では、製作時期が長期にわたることが指摘され、旋回式獸像鏡の検討では、製作時期は比較的短期に収まる可能性が指摘されている[岩本2012・2014a, 加藤2014]。いずれも後期後葉(TK43型式期・TK209型式期:6世紀後半)にまで副葬が継続する鏡である。製作時期の確定が難しいため、分配時期の抽出も困難な状況であるといえよう。筆者も、器物分配における比較基準の保証という視点から、分配時期を製作手時期に近接させた理解を提示してきた[上野2012ab・2013a]。しかし、同工鏡とも呼べる、類似した図像をもつ鏡群の副葬時期が限定されることから、製作時期を推定した岩本崇の主張には注目しておきたい。副葬時期を製作時期に重ね、結果として製作・入手と分配と副葬を同じ時間幅でとらえる性格をもつものである。

南北朝鏡 踏返模倣の特徴をもつ、いわゆる同型鏡群である。踏返模倣という様式的特徴により製作時期を5・6世紀の南北朝時代に求めることはできるが、それ以上の絞りこみは困難である。南朝との交渉を反映した入手が想定され、入手時期をおおむね5世紀に限定している[樋口1960, 小林1966, 川西1992・1993ab・2000・2004, 車崎2002b, 上野2007, 岡村2011, 辻田2013・2014ab]。

副葬は、中期後葉（TK208 型式期：5 世紀後葉）を嚆矢として、後期初葉～中葉（TK23・47 型式期、MT15 型式期、TK10 型式期）に集中し、後期後葉（TK43 型式期・TK209 型式期：6 世紀後半）にまで継続する [川西 2004, 上野 2015a]。入手時期は中期後葉から後期初葉（5 世紀後半）に限定されるものの、副葬時期は後期後葉（6 世紀末）に至るため、保有期間が発生している。分配時期を入手時期に近接させた短期分配の理解と、分配時期を副葬時期に近接させた長期分配の理解が想定できるが、南朝との交渉で得た経緯や同型鏡を模倣した倭鏡の製作・副葬動向を重視すれば、短期分配の理解となる [川西 2000・2004, 上野 2011b・2012ab・2013ab]。特に倭鏡との関係では、同型鏡を忠実に模倣した倭鏡が癸未年銘をもつことや模倣倭鏡の一つである交互式神獸鏡を 6 世紀（後期前葉）以降に副葬するため、同型鏡の不足を補い倭鏡を創出したという理解を生み、主要な分配時期を 5 世紀に求めることになる。一方で、共伴器物との関係を重視し、同型鏡群を継体朝の分配戦略としても評価する立場では、分配時期を副葬時期に近接させて、分配時期が後期前中葉（MT15・TK10 型式期）にまで継続する長期分配で理解する [福永 2005c・2007・2011, 高松 2011, 辻田 2012c・2014b・2015]。筆者も、副葬事例に 5 世紀に遡る例を欠く浮彫式獸帯鏡（群馬県綿貫観音山古墳出土鏡等）については、分配が長期に継続した可能性を想定する必要があると考えている [上野 2015b]。同型鏡でも、分配時期の認識が分かれる結果となっており、三角縁神獸鏡や三国西晋鏡と共通した様相がみえるのである。

なお、改変を加えない踏返模倣鏡は、原鏡である漢鏡との区別が困難である。図像表現を含めた表面形状の特徴により踏返鏡を抽出し得ても [笠野 1993]、その製作時期を判断することは難しい。近年では、鈕孔の形状を指標とした弁別が提起されており、有効な指標として注目されつつある [辻田 2013・2014a・2015]。こうした状況にあるが、中期前葉や中葉に複数の副葬がみえる雲気禽獸紋鏡（虺龍紋鏡）や双頭龍紋鏡などについては、南朝遣使と結びつけた理解が提起されている [東 1990・1992, 川西 2004, 上野 2011b, 辻田 2014b]。これら諸鏡の副葬時期は同型鏡群よりも早く、副葬時期に重なりをもたないため、同型鏡群に先行する南北朝期として認識するのである。入手時期と分配時期を副葬時期と同じ時間幅でとらえ、その入手経緯を社会情勢で整合させた理解である。中期・後期古墳出土の漢鏡を南朝の遣使と結びつけて理解する傾向があることに⁽⁷⁾、分配時期を副葬時期に近接させる意識が強く作用していると指摘しておきたい。

2 分配時期の推定

三国西晋鏡 漢鏡、三国西晋鏡、三角縁神獸鏡、南北朝鏡、倭鏡について、既存の議論を製作時期と入手時期と分配時期と副葬時期の関係で整理してきた（表 1）。製作・入手時期と副葬時期に隔たりがあれば、分配時期をどちらかに近接させて理解する必要があった。分配時期を製作・入手時期に近接させれば短期分配となり、副葬時期に近接させれば長期分配となる。

三角縁神獸鏡と三国西晋鏡の一部と倭鏡では、製作順序を反映して副葬が推移するため、製作時期と副葬時期を対応させた理解が可能であった。しかし、現象は同じでも、倭鏡は製作・入手時期と分配時期と副葬時期を同じ時間幅でとらえるのに対して、三角縁神獸鏡と三国西晋鏡は中国鏡として入手時期が限定されるため、入手時期と副葬時期に隔たりが生じた。製作段階を反映して副葬が進行するため、分配時期をどちらに近接させても、論理の整合性は損なわれることになる（図 1）。

分配時期を製作・入手時期に近接させれば、新相の鏡を分配する時期に、先に分配した古相の鏡だけを副葬する時期を認めることになる。分配時期を副葬時期に近接させれば、分配主体が新相の鏡を入手する時期に、古相の鏡だけを分配する時期を認めることになる。図1のアミ部分において、論理に無理が生じことは、指摘したとおりである。中期（4世紀後葉以降）にまで副葬が継続する三角縁神獸鏡と三国西晋鏡の入手を3世紀に限定する理解は、分配時期をどのように設定しても論理の整合性を保つのが難しい。社会情勢により入手時期を絶対視するのではなく、製作・入手と分配と副葬の関係を調和させた、整合的な理解の構築が肝要なのではないだろうか。三角縁神獸鏡の長期編年論では一部を倭鏡として認識し、双頭龍紋鏡では入手時期を下げて、その整合性を確保した理解が存在した。いずれも、製作・入手時期を分配時期に近接させた理解であるが、三角縁神獸鏡では製作時期と入手時期を同一視して製作時期を下げた調整であり、双頭龍紋鏡では製作時期と入手時期を切り離して入手時期を下げた調整といえよう。方格規矩鏡をはじめとする三国西晋鏡は、これらと同じ論理に基づいた理解が必要なことは、先に指摘した通りである。型式変遷と副葬動向が同調する場合には、製作時期と副葬時期を同一の時間幅でとらえ、製作・入手と分配と副葬が一連で理解すべきことを示しているといえよう⁽⁸⁾。

三角縁神獸鏡と第1期倭鏡 一方、製作・入手時期と分配時期と副葬時期とを同時にみる三角縁神獸鏡や倭鏡においても、製作時期を大きく隔てた副葬事例が目ざされている。製作順序を反映した副葬の推移と、製作時期を大きく外れた副葬は、相反する現象なのであろうか。

まず、出土資料から副葬時期や製作時期を抽出するプロセスを確認したい。出土資料（副葬資料）を集成して型式分類がおこなわれ、型式別に副葬期間（一般的には使用・流通年代）が整理される。製作順序に従って副葬期間を配列することにより、製作の開始は副葬開始時期を以て理念的に設定され、製作の終焉は後続型式の出現を以て理念的に設定されることになる。こうした枠組みの中では、主要時期を外れた副葬は製作時期の抽出過程で、製作時期との隔たりを与えられることになる。福永伸哉や岸本直文、下垣仁志らが注目する製作時期と副葬時期の重なりは、製作時期の抽出過程における中心的存在であり、田中晋作や森下章司、加藤一郎や辻田淳一郎や筆者が個別の事例で注目した長期保有鏡は上述の副次的な存在だといえよう。製作時期の抽出過程と、そこで製作時期と隔てられた長期保有鏡とを、模式図で示したのが図2である。図2で破線枠と破線の吹き出しを付けたものが、中期古墳に副葬した三角縁神獸鏡や大阪府桜塚古墳群に副葬した第1期倭鏡、あるいは丸隈山古墳・千足古墳・長坂聖天塚古墳の事例に該当するのである。製作順序を反映した副葬の推移と、製作時期を大きく外れた副葬は、決して相反する現象ではない。普遍性に注目するか、特殊性に注目するかの違いに過ぎない。

次に、分配時期を抽出する過程に注目してみよう。製作順序を反映した副葬の推移を重視すれば、分配時期を製作・入手時期に近接させることになり、副葬時期の違いは、分配後の保有期間の長短を反映するものとして理解する〔森下1998a, 福永2005a, 下垣2011, 岸本2013〕（図3）。ところが、地域社会の事情で保有の長期継続を想定し難い事例もあることは先に指摘したとおりである〔辻田2014b, 加藤2015ab, 上野2016〕。こうした少数の存在は、分配時期を副葬時期に近接させて、分配の長期継続を以て理解することになる。両者は択一的にとらえがちであるが、両者とも現実に生じている事象なのであり、両者を包括する理解の提示が必要だと考える。ここでは、以下のような理

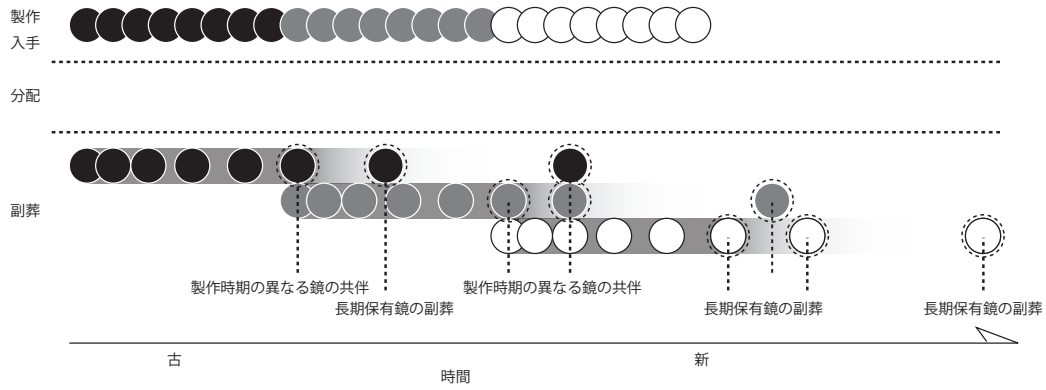


図2 型式分類と製作時期の設定

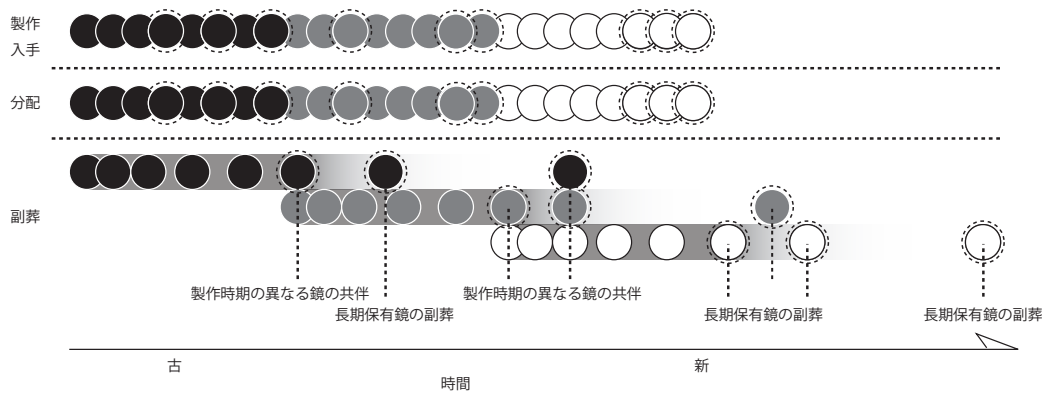


図3 分配時期の抽出モデル(1)

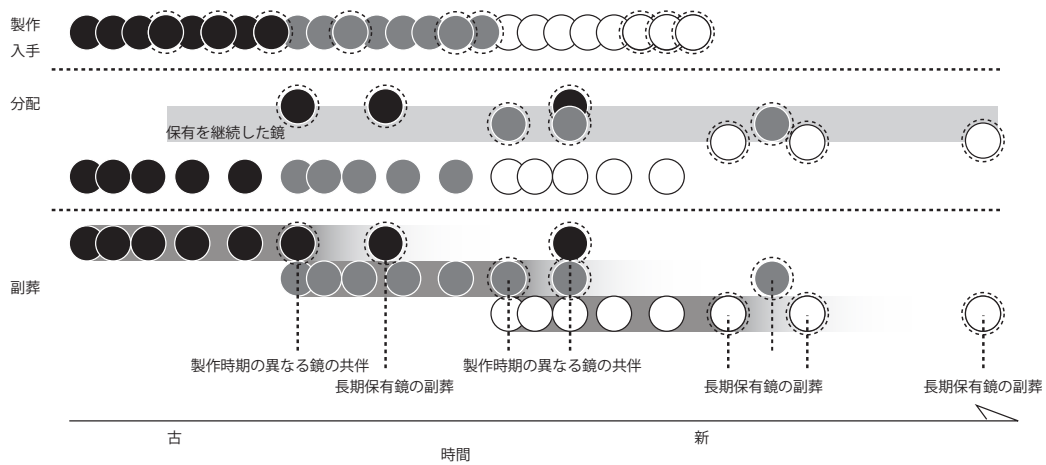


図4 分配時期の抽出モデル(2)

解を提示したい。製作・入手後に大半は分配の対象となるが、一部は分配することなく分配主体のもとで保有が継続され、後年新たに分配の対象となった(図4)。保有を継続するという現象は、鏡を保有する存在に等しく発生しうる可能性があり、地域社会での保有継続を想定するのであれば、論理の一貫性を損なうことなく、鏡を保有する存在としての分配主体にも保有の継続を認めうるのである。三角縁神獸鏡や第1期倭鏡においては、製作時期に即した分配を中心としつつも、分配主体が保有を継続させて分配が長期に継続する一面があることを主張しておきたい。

ここで注目したいのは、副葬現象が検討の基礎にあることである。製作動向は、副葬現象を母体として描出されるものであり、紀年銘など直接の製作情報に拠らない限り、製作時期は副葬時期に従属する(規定される)性格をもつ。製作・入手時期と副葬時期が隔たる場合に、分配時期を製作・入手時期に近接させた理解は、仮定の上に仮定を重ねることになり、かなり危うい論理が展開する可能性を孕む。三国西晋鏡も三角縁神獸鏡も第1期倭鏡も、それを示唆しているのではないだろうか。分配時期を副葬時期に近接させた視点が論理的な整合性を保つ傾向があることは、諸論を整理した中で示してきた通りである⁽⁹⁾。ことに、三角縁神獸鏡や南北朝鏡などの中国鏡にその傾向は強い。ここに、副葬現象を検討することの重要性を改めて認識する次第である。中国鏡の入手時期や分配時期は、国際環境といった鏡以外の視点を優先するのではなく、鏡の副葬時期からも求めるべきことを、改めて指摘しておきたい。

分配時期を抽出する過程を見直し、大半の鏡は製作・入手時期と対応して分配・副葬が進行するが、一部は分配主体のもとで保有が継続され、後年新たに分配の対象となる理解を、中国鏡の副葬現象にも倭鏡の副葬現象にも適応できるモデルとして提示した。長期保有が分配主体のもとでもおこなわれた可能性を指摘したのであるが、それでは何故保有を継続したのであろうか。分配が継続して進行する理由や背景、そのメカニズムに焦点を絞りつつ、検討を進めることにしたい。

③……………倭鏡と対照した中国鏡の評価

中国鏡と倭鏡 ここまでは、中国鏡と倭鏡を区別して整理を進めてきた。しかし、古墳時代には中国鏡と倭鏡が併存したのであり、中国鏡は倭鏡を創出する模倣対象でもあった。その多くは漢鏡を対象としたものであり、古墳時代前期中葉には模倣が始まるのである。中国鏡の入手経緯や入手時期は確定できなくても、倭鏡を創出した分配主体が模倣の原鏡となる漢鏡を保有したことは確実である。副葬という使用の面だけでなく、製作・生産の面においても、中国鏡と倭鏡の相互関係はみえるのである。以下では倭鏡創出への関与という視点で、中国鏡の評価を進めてみたい。

古墳時代前期から中期前葉にかけて生産した第1期倭鏡は、6段階に区分されているが〔下垣2003ab・2011〕、出現する倭鏡と原鏡との関係を整理してみた(表2)。Ⅰ期(前期中葉前段)には方格規矩鏡や内行花紋鏡、各種画文帯神獸鏡や上方作系浮彫式獸帯鏡が対象となっており、Ⅱ期(前期中葉後段)にはそれらに加えて斜縁神獸鏡が模倣の対象となっている。方格規矩四神鏡や鳥頭獸像鏡は、Ⅰ期に出現した諸鏡と系列が異なっており、別の方格規矩四神鏡や浮彫式獸帯鏡を対象に新たな模倣がおこなわれた可能性がある。Ⅲ期(前期後葉前段)には画文帯同向式神獸鏡と画文帯対置式神獸鏡、斜縁神獸鏡や画像鏡を対象とした模倣が、Ⅳ期(前期後葉後段)には斜縁神獸鏡と

表2 創出した倭鏡とその原鏡の対応

製作段階	表現形態	倭鏡 鏡式	原鏡													
			漢鏡 4・5 期			漢鏡 5・6 期		漢鏡 7 期前半		漢鏡 7 期後半				三国鏡		
			方格規矩四神鏡	細線式獸帶鏡	内行花紋鏡	盤龍鏡	画像鏡	上方作系浮彫式獸帶鏡	画文帶環状乳神獸鏡	画文帶同向式神獸鏡	画文帶対置式神獸鏡	斜縁神獸鏡	斜縁四獸鏡	画文帶求心式神獸鏡	三角縁神獸鏡	
I	平彫	内行花紋鏡			●											
I	線彫	方格規矩四神鏡 A 系	●						○	○	○					
I	浮彫	龍鏡 A・B 系				▲			●	●					●	
I	浮彫	鳥頭獸像鏡 A 系						●								
I	浮彫	獸像鏡 I 系						●					●			
II	線彫	方格規矩四神鏡 B 系	●						○	○	○					
II	線彫	方格規矩四神鏡 C 系	●						○	○	○					
II	浮彫	鳥頭獸像鏡 B 系						●								
II	浮彫	二神二獸 I A 系										●				
III	浮彫	同向式神獸鏡系								●						
III	浮彫	対置式神獸鏡 A・B 系									●	●				
III	浮彫	二神二獸鏡 I B 系										●				
III	浮彫	画像鏡系					●									
III	浮彫	神像鏡 I 系									▲					
IV	浮彫	二神二獸鏡 II 系											●			
IV	浮彫	盤龍鏡 I 系				●										
IV	浮彫	神像鏡 II 系														●
V	浮彫	分離式神獸鏡系											●	●		
V	浮彫	二神二獸 III 系											●			

●：模倣原鏡となる鏡 ○：部分的に模倣原鏡となる鏡 ▲：模倣原鏡の可能性が指摘できる鏡

盤龍鏡、三角縁神獸鏡を対象とした模倣がおこなわれている。V 期（前期末葉）にも、斜縁神獸鏡や斜縁四獸鏡を対象とした模倣がおこなわれている。倭鏡の古段階・創出期（I・II 期）にも、中段階・展開期（III・IV 期）にも、新段階・衰退期（V・VI 期）にも多様な漢鏡を模倣しているのである。ここで示した模倣とは、新たな倭鏡を創出した生産の始まりとしての模倣を取上げたものである。

倭鏡を通してみた中国鏡 倭鏡の模倣原鏡として中国鏡を評価すれば、3 つの特徴を挙げる事ができる。第 1 に、模倣の対象が古墳時代前期に接続する 2 世紀に製作した鏡に限らないことである。神獸鏡や獸像鏡・獸帶鏡など 2 世紀に製作した鏡だけでなく、方格規矩四神鏡や内行花紋鏡など製作が 1 世紀に遡る鏡も模倣の対象となっている。第 2 に、模倣対象の選定順序と漢鏡の製作順序との間に対応関係がみえないことである。中段階に登場する画像鏡や盤龍鏡は、古段階に模倣の対象となった各種の画文帶神獸鏡や獸像鏡よりも製作年代が遡る鏡である。新しい時期に、古い鏡を模倣しているのである。そして第 3 に、模倣の対象となる中国鏡は大半が漢鏡であり、三国西晋鏡が極めて限定的なことである。製作・入手時期の近接する三国西晋鏡ではなく、製作時期を隔て

た古い漢鏡が主たる模倣の対象となっているのである。三国西晋鏡では、三角縁神獸鏡と画像鏡が倭鏡の模倣対象となるが⁽¹⁰⁾、中小型鏡で一定の数量をもつ方格規矩鏡や双頭龍紋鏡などは模倣の対象となっていない。模倣の対象となる三国西晋鏡は、いずれも面径が20cmを前後する大型鏡であり、模倣原鏡の選別に一定の意図が作用した結果として受け止めることができる。

多くの先学が指摘するように、倭鏡の創出にあたっては、原鏡の選択に一定の意図が働いていた[森下1991, 辻田1999・2007b, 林2000・2002, 下垣2003ab・2011]。選別の背景には、多様な中国鏡が古墳時代前期の王権中枢に存在したこと、その中に一定の選択が働いたことを示しているのである。しかし、古墳時代に存在した中国鏡のすべてが模倣の対象となったわけではない。それは、倭鏡を創出する時々において、特定の中国鏡が価値をもち存在していたことを示すことでもある。三角縁神獸鏡を欠き、漢鏡と三国西晋鏡とそれを模倣した倭鏡で副葬鏡を構成する大和天神山古墳出土鏡にその一端がみえることも、先学が想定するとおりである[楠元1996等]。

倭鏡の創出は、新たな秩序という創出の意義が強調されがちであるが[辻田2007, 下垣2011]、模倣の対象となる中国鏡の価値・意義について、継続という評価も含めて、改めて考える必要があるだろう。倭鏡の創出において中国鏡の選別が一定の意味をもつことは、倭鏡と中国鏡を一括して取り扱い、倭鏡の視点を交えて中国鏡を評価することも、古墳時代における中国鏡を評価する視点の一つであることを示し、入手・分配という視点での検討が困難な漢鏡に新たな視点をもたらすものといえよう。

神獸鏡製作の管理 中国鏡と倭鏡を統合した検討は、これまでも進められてきた。両者を一括した議論の一つに、福永伸哉による神獸鏡の研究がある。倭鏡における神獸鏡の生産開始を、三角縁神獸鏡の製作・分配と関連付けて整合させた理解である[福永1999ab・2005ab]。対置式神獸鏡や斜縁神獸鏡など新たな神獸鏡の模倣、どちらかという原鏡をより忠実に模倣することに意識を置いた一群の創出が、倭鏡の創出に遅れて登場することは認識されていたが、三角縁神獸鏡とこれらの模倣神獸鏡が共伴しないことを積極的に評価し、地域社会における両者の副葬古墳の違いを対照させて、それぞれの分配主体を区分して捉え、奈良盆地東南部勢力と北部勢力による分配戦略の競合の結果として理解したのである。多くの倭鏡が主題(鏡式)を越えて単位紋様を共有するにもかかわらず、倭製鏡と想定する後半段階の三角縁神獸鏡は倭鏡との関連に乏しいため、他の倭鏡生産とは分離して理解される[森下1991等]。倭鏡とは接点のない三角縁神獸鏡の生産を、儀礼と深く結びついた神獸鏡の生産が規制された結果としてとらえ、三角縁神獸鏡の分配を推進する東南部勢力の衰退に伴って、神獸鏡の管理体制が弛緩し、新たな神獸鏡生産が新興の北部勢力(佐紀勢力)によって推進されたと、福永は理解するのである。中国鏡と倭鏡を統合させて、画文帯神獸鏡から船載三角縁神獸鏡へ、船載三角縁神獸鏡から倭製三角縁神獸鏡へ、倭製三角縁神獸鏡から倭製神獸鏡へとつながる神獸鏡の系譜を大局的に評価したものといえよう。

面径を反映した鏡の序列 倭鏡は大型鏡・中型鏡・小型鏡を含み、主題を共有しつつも形態(面径)の異なる鏡が併存することは早くから指摘されていた[和田1986・車崎1993等]。第1期倭鏡を体系的に整理した下垣仁志は、倭鏡のみで面径に従った序列を構成する一群と、倭鏡と中国鏡を併せて面径に従った序列を形成する一群があることを指摘している[下垣2003b・2011]。前者は龍鏡と捩紋鏡、対置式神獸鏡と神頭鏡が該当し、複数の中国鏡から要素を抽出して融合して倭鏡を

創出し、その一部を抽出した小型鏡を同時に創出した現象を指摘する。一方で、方格規矩鏡は倭鏡に大型鏡をみるものの、小型鏡や中型鏡の数は少なく、三国西晋鏡の方格規矩鏡が中小型鏡の意義を果たしていたと指摘する。形態差（面径差）を反映した分布パターンに基づき、大型の倭鏡と中小型の中国鏡が一つの序列を形成していたと指摘するのである。中国鏡と倭鏡を一括して検討することにより、古墳時代の中国鏡の意義を見出したものと評価できよう。前章でみたように、三国西晋鏡の方格規矩鏡は、入手時期と分配時期を抽出するのが困難であるが、倭鏡とあわせて副葬をみることで有意な現象を抽出した意義は大きい。模倣の原鏡という製作の次元と、副葬あるいは保有という使用の次元とあわせて、中国鏡と倭鏡が相互に関連して存在したことを示す重要な指摘である。

後期における倭鏡と南北朝鏡 古墳時代後期の第3期倭鏡についても、倭鏡と対比した中国鏡の分配時期が言及されている。第3期倭鏡の交互式神獸鏡は、同型鏡（南北朝鏡）の画文帯同向式神獸鏡を原鏡とした模倣鏡であるが、後期（6世紀）に登場にすることから、分配主体のもとにこの時期まで同型鏡を保有していたことが指摘される〔森下1991〕。同じく、癸未年銘鏡（隅田八幡神社蔵鏡）も同型鏡の画文帯仏獸鏡と画像鏡を原鏡としていることから、癸未年（503）の6世紀初頭段階には模倣原鏡として、2種の同型鏡を保有していたことが指摘されている〔川西2004〕。また、第3期倭鏡には三角縁神獸鏡や第1期倭鏡を模倣した倭鏡の存在が指摘されており、前期以来の長期にわたり三角縁神獸鏡や第1期倭鏡が保有を継続したことが推定されている〔加藤2015c〕。いずれも倭鏡製作の視点から、原鏡となる中国鏡の保有を実証するものであり、確定が困難な中国鏡の分配時期に一つの定点を与えている。なお、第3期倭鏡の検討では、いずれも中国鏡の長期保有、すなわち分配の長期継続を検証することになっているのは興味深い。三角縁神獸鏡にせよ、同型鏡群にせよ、分配開始時期よりも下る時期に分配主体のもとでの保有を確認しているのである。そして、分配を目的とした新たな創出の原点になっていることは、継続した保有が単に保有を目的とするだけでなく、分配が長期に継続する中での保有が継続したことを示すのである。前章で指摘した、分配主体のもとでの長期保有を、倭鏡の創出という視点でも確認しうるのである。

主題の共通する中国鏡と倭鏡を対照することにより、中国鏡の保有状況が明らかとなり、その入手時期や分配時期についても新たな展望をもたらす。以下では盤龍鏡を対象として、主題を共有する中国鏡と倭鏡を一括して取り扱い、漢鏡の入手時期と分配時期あるいは、長期保有について具体的な分析をふまえた検討をおこないたい。盤龍鏡は他と異なる特異な図像をもち、同種鏡の保有に一定の意義を想定しうること、古墳出土の盤龍鏡には漢鏡・三国西晋鏡・倭鏡があり、倭鏡の創出過程と各時期における相互関係を検討することが可能なことによる。

④……………盤龍鏡の検討

1 古墳時代の盤龍鏡

盤龍鏡とは、紀元1世紀の後漢前葉に登場した鏡であり、2世紀中葉頃まで製作が継続した鏡である〔岡村1993, 上野2003〕。浮彫で龍を大きく表現し、躯幹部分は鈕に隠れ、鈕から頭部、四肢・

尻尾が飛び出る様態となる。神獣像を全形で表現する後漢鏡の浮彫表現鏡群にあっては特異な鏡だといえよう。主題の図像を区画する乳を欠くことも、同時代の後漢鏡とは一線を画している。後漢の盤龍鏡は、三国西晋鏡においても倭鏡においても、模倣の対象となった。古墳に副葬した盤龍鏡には、後漢鏡・三国西晋鏡・第1期倭鏡がある(図5)。以後は、それぞれ後漢製鏡、魏晋製鏡、倭製鏡という名称を用いる。⁽¹¹⁾魏晋製鏡には、三角縁盤龍鏡と景初四年銘盤龍鏡を含む。三角縁盤龍鏡は、前半段階(長期編年での舶載段階)の三角縁神獣鏡にしかみえず、いずれの編年案でも前段から中段にかけての製作段階が想定されている[福永2005a, 辻田2007b・2008, 岩本2008等]。暦年代で表現すれば、260年代以前の時間幅の中で製作が終了していることになる。倭製鏡は、第1期倭鏡のⅣ段階からⅥ段階にかけて製作されており、前期後葉後段から中期前葉(4世紀後葉～5世紀

初葉) にかけての製作となる。倭製鏡では、盤龍という表現は共通するものの、図像構成は多彩であり、単一の系列ではとらえきれず、系統の異なる模倣が併存したことが指摘される [下垣 2003ab・2011]。

図像の面でも3種の盤龍鏡には関係がみえる。倭製鏡には、香川県赤山古墳出土鏡や京都府美濃山王塚古墳出土鏡、大阪府津堂城山古墳出土鏡など、獣間(龍虎間)に正面形の神像や神頭あるいは獣頭を表現するものがある。後漢製鏡では龍頭と虎頭の間に神像表現を置くことはないが、魏晉製鏡の三角縁盤龍鏡では波紋帯盤龍鏡の2群(京都大学による目録番号2鏡と5鏡 [下垣 2010])で龍虎間に神像表現を置く。奈良県古市方形墳出土鏡では、四乳で四分割されており、龍頭と上半部を表現した二区画と、龍体のみを表現した二区画で構成している。乳による区画と主紋の龍の表現形態は、奈良県池ノ内5号墳出土鏡などの三角縁盤龍鏡との類似が指摘できる(図5)。倭製鏡は、後漢製鏡を模倣するだけでなく、魏晉製鏡をも意識した模倣があり、相互に関連する一面がみえるのである。

その一方で、後漢製鏡と魏晉製鏡と倭製鏡は面径が異なる(図6)。古墳出土鏡に限定すれば、3種の盤龍鏡は、面径により20cm以上の大型鏡と、10cm代後半の中型鏡と、10cm代前半の小型鏡に分けることが可能である。鏡の系譜と面径は概ね対応しており、後漢製鏡は小型鏡、魏晉製鏡は大型鏡、倭製鏡は中型鏡と小型鏡ということになる。大型鏡と小型鏡は概ね2:1の比率でとらえることができ、中国鏡では後漢製鏡が魏晉製鏡の約1/2の面径ということになる。

各種の盤龍鏡は、盤龍という主題表現が共通するだけでなく、神像など副像の挿入という図像的特徴や、面径という形態的特徴においても、相互の関連を見出すことができる。大型鏡・中型鏡・小型鏡の区分をもちつつ、相互に関連して存在していたことが指摘できる。

2 盤龍鏡副葬の推移

前期前葉から前期中葉 次に副葬の推移から各種の盤龍鏡の関係をみてみよう⁽¹²⁾(図7)。盤龍鏡の副葬は大型鏡である魏晉製鏡と後漢製鏡の副葬がほぼ同時期に始まる。前期初葉の副葬は、岡山県湯迫車塚古墳と兵庫県吉島古墳のみであり、中葉には魏晉製鏡と後漢製鏡の副葬が急増し、大型の魏晉製鏡と小型の後漢製鏡が併存する状況がみえる。古墳時代初葉より少し遡る可能性のある庄内式期の福岡県徳永川ノ上遺跡Ⅳ号墳墓群19号墓で後漢製鏡を副葬しているので、後漢製鏡と三国西晋鏡の副葬はほぼ併行したものと理解しておきたい。

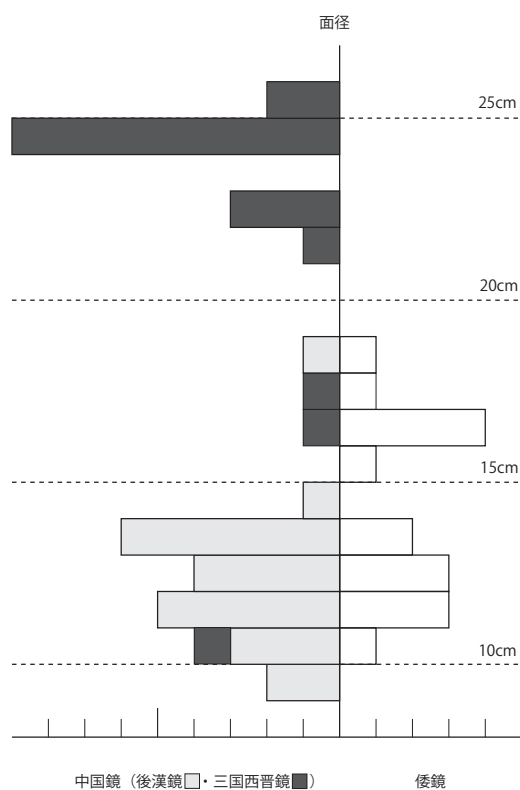


図6 各種盤龍鏡の面径分布

この時期の三角縁盤龍鏡の副葬古墳には、小札革綴冑と盤龍座浮彫式獸帯鏡の共伴によるつながりがみえる。三角縁盤龍鏡は主題が他の三角縁神獸鏡とは大きく異なり、面径の大きい三角縁神獸鏡の一つである。京都府椿井大塚山古墳、奈良県黒塚古墳、滋賀県雪野山古墳では小札革綴冑と三角縁盤龍鏡が共伴しているが、三角縁盤龍鏡の流通と数量が限定された小札革綴冑の流通に複数の接点をもつことになる。兵庫県吉島古墳と滋賀県大岩山古墳（二番山林古墳）では、魏晉鏡の盤龍座浮彫式獸帯鏡と三角縁盤龍鏡が共伴している。盤龍座浮彫式獸帯鏡は面径が23cmの大型鏡であり、「盤龍」表現をもつ大型鏡を保有することにもつながりがみえるのである。

前期後葉から中期初葉 前期後葉には倭製鏡の副葬が始まり、大型の魏晉製鏡と中小型の倭製鏡と後漢製鏡の副葬が併存する状況となる。形態の異なる3種の盤龍鏡が併行した副葬は、中期初葉まで継続する。魏晉製鏡と後漢製鏡の副葬は前段階に比べて減少するものの、前期後葉から中期初葉に至るまで、いずれの盤龍鏡も副葬が継続するのであり、中期初葉の副葬は、前期から継続した副葬として理解できるのである。

大阪府万年山古墳では盤龍座浮彫式獸帯鏡が共伴しており、前段階の吉島古墳や大岩山古墳と同じ現象がみえる。中期初葉に盤龍鏡を副葬する諸古墳では、いずれも帯金式甲冑と共伴している。しかし、大阪府和泉黄金塚古墳では等角系三角板革綴短甲〔阪口1998〕と大型の魏晉製鏡が共伴するが、同津堂城山古墳では等角系三角板革綴短甲に小型の倭製鏡が、同交野東車塚古墳では等角系三角板革綴襟付短甲に小型の後漢製鏡が共伴している。帯金式甲冑の序列と盤龍鏡の序列は対応しておらず、両者の関係は不整合である。盤龍鏡の副葬に同時代的なつながりを見出すことができるものの、帯金式甲冑との共伴は、優位な器物を保有する被葬者をつなぐ器物としての性格をみるに過ぎない。この時期には、共伴遺物を通じてタテのつながりとヨコのつながりを認めることができる。

中期前葉から中期後葉 中期前葉以降は、大型の魏晉製鏡の副葬をみず、中小型の倭製鏡と後漢製鏡の副葬に限られる。副葬開始時期の違いを反映するように、後漢製鏡の副葬は少なく倭製鏡の副葬は多い。この時期の副葬で注目するのは、TK73型式期の中期中葉に倭製鏡の副葬が多くみえることである。そして、帯金式甲冑をはじめ、金銅装馬具や装身具など卓越した副葬品と共伴することも注目される。前段階と同じく、帯金式甲冑と共伴する事例は多く、盤龍鏡と帯金式甲冑は親和的である。兵庫県茶すり山古墳では三角板襟付短甲と共伴し、滋賀県新開1号墳では複数組の甲冑と金銅装を含む初期馬具が共伴し、宮崎県下北方5号地下式横穴では馬具や金製耳飾と共伴しており、栃木県桑57号墳では金銅冠や耳飾、銅鈴（馬具）と共伴している。帯金式甲冑でも、襟付短甲や矢羽根形の地板を用いた変形板短甲（新開1号墳）など、序列の上位にある特異な形態の甲冑との結びつきがみえ、同時期でも副葬が限定的な装飾性の高い装身具或いは馬装との結びつきもみえている。しかし、盤龍鏡はいずれも小型鏡もしくは中型鏡であり、面径で表現する鏡の序列は低く、卓越するこれら共伴副葬品に比べて不相应な存在である。盤龍鏡を副葬する諸古墳にみえる共通性は、この時期にも優位な器物を保有する被葬者をつなぐ器物の一つとして盤龍鏡が機能したことを示している。

後期初葉以降 後期初葉以後は、盤龍鏡の副葬は散発的となる。副葬する盤龍鏡は小型の後漢製鏡と倭製鏡に限られる。⁽¹³⁾副葬は限定的であり、前段階よりも収束する。福岡県山ノ神古墳では金銅装馬具や小札甲と共伴し、宮崎県島内139号地下式横穴では帯金式甲冑や装飾付大刀あるいは鍔

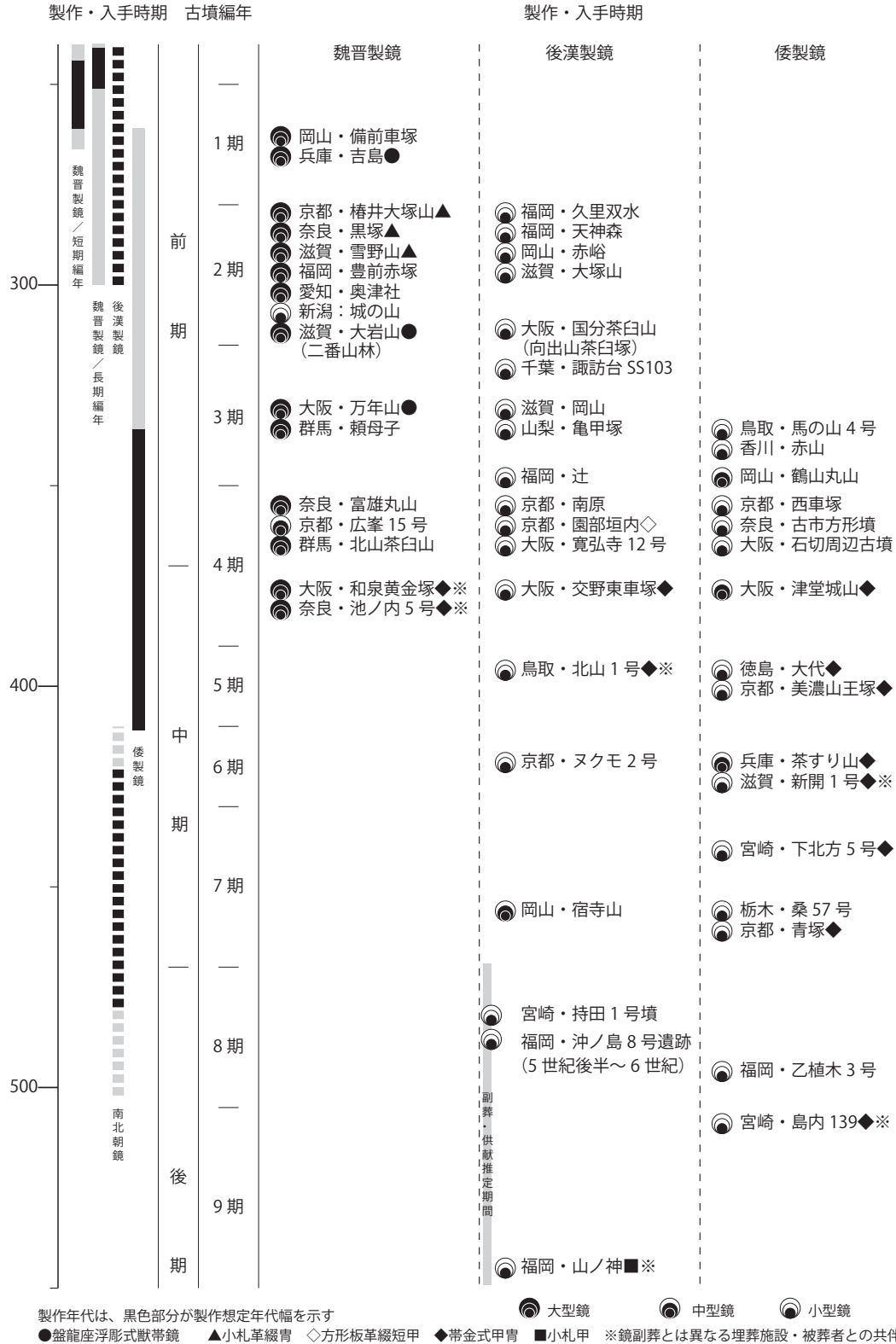


図7 各種盤龍鏡の副葬時期

銅製馬具と共伴するなど、卓越した副葬品との共伴がみえる。ここでも前段階と同じく、共伴する副葬品に比して小型鏡の盤龍鏡は不相応であり、盤龍鏡は同時代の先進的文物と親和的である。また、福岡県乙植木3号墳出土の盤龍鏡は、前段階の下北方5号地下式横穴出土鏡と図像構成が非常に酷似しており、面径もほぼ等しい。製作時期あるいは製作環境が非常に近接する同工品とも呼びうる鏡の副葬が後期初葉に連動しているのである。

盤龍鏡副葬の特徴 盤龍鏡の副葬には、4つの特徴が指摘できる。第1に、各種盤龍鏡の副葬が長期にわたり継続することである。いずれも副葬が、前期から中期にかけて継続しており、製作・入手時期の推定が可能な魏晉製鏡と倭製鏡は、副葬時期と製作・入手時期に大きな隔たりが生じているのである。第2に、いずれの盤龍鏡も時期とともに副葬が減少することである。第3に、副葬の始まりが鏡の製作順序を反映しておらず、副葬の終わりも副葬の始まりに対応していないことである。魏晉製鏡は中期初葉を終焉とするのに対して、後漢製鏡と倭製鏡は後期初葉に至る。そして第4に、大型・中型・小型という形態の違いを反映した副葬の変遷がみえることである。大型鏡と小型鏡で副葬は始まり、のちに中型鏡を交えつつ副葬が継続する。大型鏡の副葬が収束したのちも、小型鏡・中型鏡の副葬は後期まで継続するのである。

共伴遺物にみえる同時代性だけでなく、長期的視点でみても三者の副葬が連動していることがわかる。以下では、盤龍鏡の副葬から抽出できる「前期から中期への連続性」と「三種の盤龍鏡の相互関連」という現象にもとづいて、後漢製鏡の入手時期と分配時期について検討を進めることにしたい。

3 倭鏡の創出と後漢鏡の入手時期

倭製鏡の創出意義 盤龍鏡では、後漢製鏡・魏晉製鏡・倭製鏡という製作時期・生産地の違いに対応した、面径による形態差が見出せた。倭鏡を製作する前期中葉以後は、主題を共有する一群の鏡に面径を反映した序列・格差が存在したが、倭鏡のみで構成するものと倭鏡と中国鏡で構成するものとの二つの形態が認められた〔下垣2003ab・2011〕。盤龍鏡は、大型の魏晉製鏡と、小型の後漢製鏡、中型と小型の倭製鏡という対応がみえ、鏡の出自と面径が対応した後者の形態にあたる。

倭製鏡が大型鏡を欠くのは、大型鏡の魏晉製鏡が存在したために、大型倭製鏡の製作が不要であったと考える。一方、副葬の開始時期が異なるにもかかわらず、後漢製鏡と倭製鏡には共通点が多い。小型鏡を中心とすることや、中期前葉以降も副葬が継続することである。倭製鏡と後漢製鏡に類似した特徴からは、倭製鏡が後漢製鏡を輔弼する存在であることが指摘できる。倭鏡には、創出的な性格が強調されがちであるが〔森下1991、辻田1999bab・2007b・2012、下垣2005・2011〕、模倣という行為が象徴するように、漢鏡の価値を継続させるという側面（性格）も備えていたのである。

小型盤龍鏡では、前期中葉に後漢製鏡を一定数副葬した後に、前期後葉に倭製鏡の副葬が始まる。前章では、第1期倭鏡生産の中段階に盤龍鏡が登場したことを示したが（表2）、後漢製鏡と倭製鏡の副葬推移は、漢鏡が流通した後を受けて、それを模倣した倭鏡が創出され、流通したことを示すものである。模倣の原鏡は無作為に選定されたのではなく、先行する流通状況を反映して選定がなされたことを証するものである。⁽¹⁴⁾

岡山県湯迫車塚古墳や兵庫県西求女塚古墳、あるいは京都府椿井大塚山古墳など、前期前葉から

中葉にかけての古墳に副葬する後漢鏡が一定数存在することは、盤龍鏡だけでなく多様な漢鏡がこの時期に流通して後漢鏡の価値が形成されたことを反映しており、漢鏡の製作順序に関係なく多様な漢鏡が倭鏡の模倣の対象となる背景であったと理解しておきたい。

後漢製鏡の入手時期 では、倭鏡の模倣対象となった後漢製鏡の入手時期は何時か。もし、古墳時代以前に各地が個別に入手したと認めれば、後漢製鏡の副葬を経て倭製鏡の副葬が始まる現象は、各地で維持していた価値の否定（＝副葬）が進行する中にその価値を維持・拡大する倭鏡を創出することになり、矛盾した理解となる。前期後葉以後の後漢製鏡と倭製鏡の形態が類似し副葬傾向が類似することは、古墳時代前期における同時流通を反映するものであり、すべての後漢製鏡をその製作年代に照らして、魏晉製鏡よりも入手時期を遡らせ、無理に古墳時代前史的に理解する必要はない。副葬の推移と生産の視点を交え、後漢製鏡の入手時期は、倭製鏡の製作・入手時期に先行することと、その時間幅を越えないことを指摘できる。魏晉製鏡の製作・入手時期と、倭製鏡の製作・入手時期の間に位置することも含めると、後漢製鏡の入手時期は魏晉製鏡と同じ時期であり、倭製鏡を創出する以前であったと考える（図7）。

盤龍鏡の検討により、倭鏡の創出には、創作的要素だけではなく、継続・連続的性要素も併せもつことを指摘し、漢鏡が倭鏡の出現以前にも以後にも存在していたことを示した。各地が後漢鏡を独自に入手するという、古墳時代の分配システムとは別次元の前代的な入手を想定することは困難である。これは、第1期倭鏡とその模倣原鏡となった漢鏡のすべてに適応できる可能性をもつ指摘であるといえよう（表2）。前稿では、後漢後半の鏡が古墳時代前期に接続する弥生時代終末期に流入した理解に基づく解釈を示したが〔上野2014〕、古墳時代の製作・流通の双方の視点から、後漢鏡の入手時期は副葬時期に近接した古墳時代前期にも認めることになった。辻田淳一郎、下垣仁志、岩本崇の各氏と同じく、古墳時代前期に後漢鏡を入手し、日本列島内部で後漢鏡の分配が進行したと認識しておきたい〔辻田2001・2007ab・2009、下垣2013a、岩本2014b〕。その視点を敷衍すれば、画文帯神獸鏡を含めた後漢鏡の入手時期を古墳時代以前に求めることは難しいと考える。

4 分配時期と長期保有

盤龍鏡の分配時期 次に、これら盤龍鏡の分配時期について検討してみよう。先にも示した通り、魏晉製鏡の製作・入手時期は、三角縁神獸鏡の長期編年の古・中相段階であり、260年代には製作が終了していた。副葬時期は、前期初葉から中期初葉に及ぶので、3世紀中葉から4世紀末葉の暦年代を与えることができる。魏晉製鏡には、製作・入手時期と副葬時期に大きな隔たりがみえている。倭製鏡の製作・入手時期は、第1期倭鏡のIV段階からVI段階の間であるので、前期後葉後段から中期前葉の4世紀後葉から5世紀初葉の時期に相当する。副葬時期は、前期後葉から後期に至るまで継続するので、4世紀後葉から6世紀に至る長期にわたる。魏晉製鏡も倭製鏡とともに、副葬時期は製作・入手時期よりも大幅に長い。後漢製鏡の入手時期は、魏晉製鏡と倭製鏡との併行関係により、上限を魏晉製鏡の入手時期に、下限を倭製鏡の創出時期に求められることを指摘した。この入手時期と対照すると、後漢製鏡の副葬時期も、入手時期と大きな隔たりが生じることになる。

いずれの盤龍鏡も、副葬時期が製作・入手時期よりも長期にわたる（図7）。製作・入手時期と副葬時期の隔たりは、分配時期を製作・入手時期に近接させて理解するか、分配時期を副葬時期に近

接させて理解する必要がある。第2章では、既存の議論を整理して、分配時期を副葬時期に近接させた視点が、論理的な整合性を保つ解釈を提示する傾向があることを指摘し、かつ両者を択一的にとらえるのではなく、両者を包括する理解を提示した。製作・入手後に大半は分配の対象となるが、一部は分配することなく分配主体のもとで保有が継続され、後年新たに分配の対象となった、という理解である(図4)。この理解モデルに照らせば、盤龍鏡にみる副葬の長期継続も整合的な説明が可能である。副葬開始から一定の期間に副葬する例が多いことは、製作・入手時期と対応した分配を示すものであり、それを外れた少数の存在は、保有を継続した新たな分配の対象となったものといえよう。中期中葉以後に倭製鏡の副葬がやや多くみえる現象は、時期とともに副葬が減少する傾向とは様相が異なるが、いずれも帯金式甲冑を含む共伴遺物に共通性がみえ、かつその序列が高いことはこの時期における分配を反映するものと理解できる。入手したすべての鏡を分配の対象とせず保有を継続し、その一部が新たに分配の対象となる理解を以てすれば、盤龍鏡の副葬推移はより整合的な説明が可能なのである。それは、玉類の分配・副葬でも指摘されている、保有の継続と中期後半における古相の玉類を分配する現象や、熊本県マロ塚古墳出土資料にみるような製作段階の異なる甲冑の組合せがみえる現象とも同調するものである[大賀2005、杉井・上野編2012]。

保有器物の分有　そこで問われるのは、何故保有を継続したのかという事由である。ここで注目したいのは、鏡が共有を前提として格差を表現する媒体だということである。鏡は紐帯の機能と区分の機能を併せもつが、王権・政治構造という検討課題が集権的性格を帯びるため、区分の機能に注目が集まる。紐帯は区分を前提とする傾向が強く、共有現象＝紐帯が評価の対象となることは少ない。しかし、奈良県黒塚古墳や桜井茶白山古墳、佐紀陵山古墳あるいは新山古墳には、他に例をみない大型鏡の副葬や多量の副葬がみえている。分配主体やそれに近い存在も鏡を保有したのであり、受領者と同じ立場に列したことを現象は示している。鏡の流通は、分配よりも分有・共有という形容こそ相応しい表現であることを強調したい。

分有・共有という状況のもと、鏡で表現した序列を認識するメカニズムを考えてみよう。区分・序列の認識には、他者との比較が必須の条件である。授受の場において比較が可能なのは、複数を対象とした授受が行われる場合である。受領者は受領する器物の質・量を他の受領者と比較することが可能であるからだ。その逆に、単独の受領者を対象とした授受では、その価値を比較する場を失う。これまでに、参向型の授受形態が想定されてきたのはこうした背景を反映するものと考えられる[川西1992・1993ab・2004、車崎1993、下垣2011]。しかし、単独の受領者を対象とした場合であっても、分配主体が保有する器物の一部を与える場合には、分配主体と受領者との間で器物の比較は可能であり、相対的な価値を認識することは可能である。分配主体が器物を保有したこと、保有を継続する必要があったのは、こうした比較を保証する一面も備えていたのだと推測する。比較(価値)の基準を共有する範囲が広いほど、区分・序列はより普遍性を備えることになる。しかし、古墳時代には古代の官服や位階のような区分・序列を一律に共有する状況を想定することは難しい。むしろ、個別の授受の場において認識された相対的な価値こそ、受領者が認識した器物の価値であったと考える。比較の保証という点において、分配主体も器物を保有したのであり、分有という形態をとる要があったものとも考えるのも一案である。保有の継続は目的ではなく、器物を分有した結果でもあったといえよう。別の見方をすれば、保有する器物こそ、分配・分有の対象であったことを示

すものでもある。分配・分有の対象は、分配主体が保有する器物であり、製作・入手した器物を含むものの、製作・入手した器物に限定するものではなかったことを喚起しておきたい。そこに、古墳時代中期初葉以後の祭祀遺跡である沖ノ島17号遺跡で、三角縁神獸鏡や第1期倭鏡で構成する鏡群を用いた祭祀が挙行されることの背景や、古墳時代後期の古墳に三角縁神獸鏡や第1期倭鏡の副葬がみえることの背景も無理なく理解できる道も拓けよう [森下1998a, 岩本2005, 辻田2012c]。

分配の長期継続からの展望 盤龍鏡の分析により、一部には保有が継続して、分配が長期に継続することを示したが、分配の長期継続から展望する古墳時代の様相を最後に述べておきたい。

まず、前期を通じた連続性がみえることについてである。第1期倭鏡の鏡式変遷に対しては、前期後葉を画期とした政権あるいはその主導権の交替を積極的に評価する理解とそれに否定的な理解が併存する [福永1999ab・2005a, 林2002, 下垣2004・2011, 辻田2007b・2014b]。中国鏡と倭鏡を一括した盤龍鏡の分析では、副葬と生産が連動しつつ継続した様相がみえるのであり、断絶を積極的に評価した政権・主導権交替は見出しにくい。

前期から中期への連続性については、中期中古墳出土の三角縁神獸鏡を対象とした田中晋作に近い理解となる。田中は三角縁神獸鏡の分配と帯金式甲冑の分配を競合的にとらえ、政権交替あるいは政権内部での覇権抗争としての理解を提示した [田中1993・2001・2008等]。本論で指摘した分配の長期継続は、大型の三角縁盤龍鏡だけでなく小型鏡や中型鏡の盤龍鏡にもみえていた。帯金式甲冑と盤龍鏡は共伴するものの、それぞれの序列が対応しておらず、帯金式甲冑の分配と鏡の分配は競合的（競覇的）ではない。帯金式甲冑と鏡の序列の不整合は、それぞれの分配が別次元・別の論理を以て併存したことを示しているのである。そこには、古墳時代中期に複数の分配主体が併存する状況を想定するのが妥当である。前期に中国鏡を入手し、倭鏡を創出し、それらの分配を展開した政治主体は中期においてもその活動を継続させたとみておきたい。

前期から中期に至る鏡の長期分配は、連続の性格が強いことを示し、前期後葉にも中期初葉にも政権・主導権の交替を想定する状況は見出しにくい。そこに、帯金式甲冑を分配する主体と鏡を分配する主体が併存した、諸勢力が複合した連合的・協業的性格をもつ古墳時代中期の政権構造を見通しておきたい。連続性をより積極的に評価し、威信財としての価値が低下したことにより、鏡の流通が低迷するという先学の指摘に近い見解を支持したい [岩本2005, 下垣2011]。むしろ、連続性・継続性こそ重要であり、生産は低迷しつつも継続することにこそ、鏡が古墳時代社会に必要な器物として存続する所以がある [森下1991・2011, 下垣2011, 加藤2015c]。

そこには、政治関係を反映する威信財としての象徴的な意味だけではなく、社会の維持・再生産と深く結びついた理念的な儀礼具として必要とされる鏡の姿を見出せるのである。社会に埋め込まれた儀礼を媒介として政治関係が間接的に表現されることは、つとに先学が指摘する通りであり [福永1999ab・2005b, 森下2005b]、儀礼に必要な実用性が保有・生産・分配を継続させたものと考えられる必要もあろう。鏡の分配主体は儀礼の管掌を目的として、前期から中期を越えても政治機構の一翼を担いつづけたという想定を持してみたい。

最後に、分配が長期に継続する場合は、鏡式ではなく面径こそ価値を示す指標であったことを推測しておきたい。鏡の分配が入手・製作と連動して理解されてきたように [森下1998, 上野2012a], 入手や製作が繰り返される中で、各製作・入手段階での価値を維持した分配が継続すると

は考えにくい。面径という普遍的価値に集約して保有を継続・蓄積したと考えれば、鏡式－各入手・製作段階－の価値指標が、短期分配を強要することからも解放される。鏡式は、面径の大小を反映する副次的な価値指標であったといえよう。古墳の副葬鏡には、面径の異なる大小の鏡が共伴する事例が数多いが、主題の異なる多彩な鏡式を組合せて副葬していることは、まさに鏡式ではなく面径に価値を集約した鏡の取扱いを示すものである。こうした様相こそ、前稿で予察した製作段階とは異なる価値に基づく分配の一つであり〔上野 2015a〕。分配とは、製作・入手した器物を含めた「保有する器物」を対象とすることを明示するもの⁽¹⁵⁾と考える。このことは、今後の検討に委ねたい。

おわりに

古墳に副葬した中国鏡と倭鏡を対象に、鏡にみる4つの時間相の認識を整理し、古墳時代政治構造の議論に關与する分配時期の抽出プロセスについて比較検討した。

流通論の基礎が副葬現象にあることを改めて確認し、分配時期を副葬時期に近接させて、その分配時期と整合する入手時期や入手経緯を模索する傾向が強いことを示した。三国西晋鏡では、鏡以外の情報が想定させる入手時期と、副葬時期を基軸とした理解との整合性を保つことが難しいことを示した。一方で、分配時期の抽出が可能な三角縁神獸鏡や倭鏡でも、製作・入手時期と副葬時期が大きく隔たる事例が存在する。これらを総合的に説明するものとして、製作・入手時期に対応した短期分配を主としながら一部は保有を継続して分配が継続したとする理解を示した。以下では、倭鏡の創出における中国鏡の保有、副葬の長期継続とその推移から、この理解モデルを検証した。

まず、中国鏡と倭鏡を一括して検討することにより、模倣の対象を分配主体（＝生産主体）が保有したことを示し、中国鏡の入手時期・分配時期の定点が与えられることを示した。倭鏡の創出には、創作的要素だけでなく、継続・連続的要素もあることを改めて指摘し、漢鏡が倭鏡の出現以前にも以後にも存在していたことを示した。

そして、同じ主題を共有する一つの鏡を取上げ、形態的特徴と副葬推移を対照して、中国鏡と倭鏡の相互関係を検討した。盤龍鏡では、後漢製鏡と倭製鏡の取扱いが共通しており、両者が相互補完しつつ長期にわたり副葬が継続することを示した。想定しうる製作・入手時期と対照することにより、先に示した理解モデルと極めて整合する現象が見えることを指摘した。製作・入手時期と対応する短期分配を中心としつつも一部は保有を継続し分配に供したという理解モデルを、盤龍鏡という具体的事例によって検証したのである。

保有の継続は、分配の継続を目的とするだけでなく、分配主体も器物を保有する「分有」の性格を帯びた分配に起因する本質的なものである。鏡で表現する区分・序列は、他者との比較が必須の条件であり、比較の保証という点において、分配主体も器物を保有したのであり、分有という形態をとる要があったものと考えた。鏡の面径や数量に絶対的な価値を見出すのは難しく、個別の授受の場において認識された相対的な価値こそ、受領者が認識した器物の価値であったと考えることによる。そして、入手や製作が繰り返されるなか、面径という普遍的価値に集約して保有を継続・蓄積したと考えることにより、鏡式という入手・製作段階の価値を損なわない長期分配の理解を示したのである。

註

(1)——3段階に区分した倭鏡に前期倭鏡・中期倭鏡・後期倭鏡の名称を用いることもあるが、第1期が前期中葉から中期前葉、第2期が中期中葉、第3期が中期後葉以降となり、倭鏡の様式は時期区分と明確には対応しない。そのため、筆者は第1期倭鏡などの名称を用いている。

なお、古墳の編年指標としては、和田晴吾による古墳編年および、前方後円墳集成編年に従う〔和田1987、広瀬1992〕。中期の画期は帯金式甲冑に象徴する武装具体系の出現を指標とし〔橋本2005〕、後期の画期は古墳の築造形態（首長墳の築造動向、群集墳の出現）あるいは馬具・鏡による器物様式を指標とした〔和田1987・1992、上野2015a〕。

(2)——漢鏡の製作時期を反映した流通時期を想定する場合には、弥生時代の暦年代観の遡及も併せて認識する必要がある〔上野2014〕。

(3)——中国鏡を日本列島の外から入手する場合に、朝鮮半島南部を故地とする可能性も想定できる。しかし、朝鮮半島は鏡の保有が極めて限定的な世界であり、自地での消費・副葬がないにもかかわらず、倭への流通を目的に中国から入手することを想定するのは困難である〔上野2004・2013b・2015c〕。

(4)——ただし、その場合には東晋もしくは南朝との交渉により入手した鏡に、華北の鏡が多いことを説明する論理が必要である。ここで対象とした方格規矩鏡、双頭龍紋鏡はいずれも、華北の創作模倣鏡（三国西晋鏡）だからである。

(5)——下垣仁志は、生産という視点で全てを舶載鏡とする短期編年の立場をとりながら、副葬（流通）という視点で長期編年と同じ主張をとる〔下垣2011〕。表1では、それをふまえて長期編年と短期編年の双方に記載した。

(6)——辻田淳一郎は、福岡県丸隈山古墳出土鏡について、保有期間を経たことを認めるものの、分配時期を入手時期に近接させるのか、副葬時期に近接させるのか明言はしていない。しかし、中期的要素と共伴する傾向が強いことを重視するように見受けるところから、分配時期を副葬時期に近接させる加藤や筆者の見解に近い認識をもつものと推測する。

(7)——大阪府珠金塚古墳出土鏡（画文帯環状乳神獸鏡）など中期に副葬する漢鏡の入手時期を中期＝南北朝期＝5世紀に求める見解がある〔岡村1999〕。後期古墳出土鏡では、大阪府海北塚古墳出土鏡（細線式獸帯鏡）や滋

賀県鴨稻荷山古墳出土鏡（内行花紋鏡）、福井県十善の森古墳出土鏡（方格規矩四神鏡）、熊本県国越古墳出土鏡（方銘四獸鏡）、同才園古墳出土鏡（銘文帯求心式神獸鏡）などが、こうした対象になる鏡として挙げうる。鏡の分配時期を副葬時期に近接して想定する方が、共伴器物や地域における古墳築造動向と整合的なため、南北朝鏡を入手し分配する中後期に分配時期を求める傾向は強くなる。

(8)——三角縁神獸鏡と方格規矩鏡は、同じ三国西晋鏡の様式に含まれ、製作時期も同じ時間幅を想定しながら、入手時期と分配時期の理解に大きな違いが生じた。三角縁神獸鏡は、一部を倭製品として認識することによって、製作＝入手＝分配という時期の調整が図れたが、方格規矩鏡では中国鏡との認識のため、その調整が図れず入手時期を限定するのか、対中国交渉が展開しない時期に入手するのが求められた。方格規矩鏡の入手を4世紀に想定するのであれば、同じ三国西晋鏡の三角縁神獸鏡の入手も4世以降に求めることは可能である。方格規矩鏡の入手を3世紀に限定するのであれば、三角縁神獸鏡の製作・入手も3世紀に限定すべきである。三角縁神獸鏡の長期編年論に立つのであれば、4世紀以後の入手を求めることになり、4世紀に入手が不可となり倭製化が果たされたという、鏡様式という論理の整合性を欠くことになる。三国西晋鏡の問題は、今後とも継続した検討が必要であろう。

(9)——型式分類をおこないつつも、時間概念に直接結びつけず、メタなもの（作業媒体）として取り扱い、その組合せの中から時間を抽出する試みが共有されつつある。森下章司による三角縁神獸鏡型式に基づく編年や、前期古墳の配列という認識が該当する〔森下1998b・2005a〕。いずれも副葬現象を注視した時間の抽出であり、ここでの指摘と同じ方向性をもつものといえよう。

(10)——神像鏡Ⅱ系（京都府東車塚古墳出土鏡等）は三角縁神獸鏡を模倣した可能性があり、画像鏡（奈良県佐味田宝塚古墳出土鏡等）は尚方銘画像鏡（同古墳出土）を模倣した可能性が高い〔川西1991、下垣2011〕。

(11)——三国西晋鏡の盤龍鏡を「魏晋製鏡」と呼称するのは、3世紀の鏡生産が南北で対をなし、現状では華南に盤龍鏡の生産を見出せないことによる。特定の時代に製作された鏡の総称としては、従前通り「後漢鏡」「三国西晋鏡」「倭鏡」の名称を用いる。

(12)——図7に示した古墳の年代については、各地の地

域編年案を参照し、ある程度の時間幅に副葬時期が絞り込めるものに限定した〔広瀬・和田編 2011, 一瀬・北條・福永編 2013〕。鏡に関する情報は、国立歴史民俗博物館による出土鏡データベースに基づいて分析を進めた〔白石・設楽編 1994・2002〕。宮崎県島内 139 号墳出土鏡は〔橋本・中野 2016〕を、千葉県諏訪台 SS103 は〔北見ほか 2015〕を参照した。

なお、倭製鏡には、盤龍鏡として認識することに異論が出る可能性のある鏡も含めた。徳島県大代古墳出土鏡は、小破片に過ぎないが、曲線状の図像が、盤龍鏡の龍頭より伸びる角の表現と類似することから、盤龍鏡と認識した。京都府青塚古墳出土鏡は、四獣形鏡と形容されることが多いが、獣像は獣頭と上半身のみの表現であり、全形を表現していない。下半身は鈕下に隠れる形状となっていることから、景初四年銘鏡のような、四獣表現の盤龍鏡との関係が想定でき、盤龍鏡として認識した。

(13)——中国鏡と倭鏡を区別せずに、2 世紀から 3 世紀の鏡を一括して整理した森下章司の検討も、こうした視点をふまえつつ評価すべきであると考え〔森下 2007〕。

(14)——宮崎県持田 1 号墳（計塚）出土鏡については、中期後葉以後に位置づけた〔梅原 1969〕。古墳は柄鏡形の墳形で前期古墳に位置づけられるが、遺物報告にある共伴鏡は同型鏡の浮彫式獣帯鏡であるため、その共伴を确实視すれば、中期後葉以降に位置づける必要がある。出土古墳の推定が不可能であり、同型鏡との共伴も不确实であるが、図 7 ではひとまず遺物報告の記載に基づいた認識を示した。

(15)——鏡式よりも面径を優先させて価値を認識するとは、特定の鏡式が特定地域に集中することにも注意は必要である。盤龍鏡では、滋賀県南部と宮崎県域に集中する傾向がみえることには注目しておきたい。後者では、下北方 5 号地下式横穴と島内 139 号地下式横穴出期中葉以降に盤龍鏡が副葬されており、出土遺構は確定できないが、持田古墳群では持田 1 号墳（計塚）で同型鏡と共伴したとする盤龍鏡と、景初四年銘盤龍鏡の出土が推定されている。不確定要素は大きいものの、製作・入手時期を外れた中期中葉以後に副葬が集中する可能性のある事例として注目しておきたい。

参考文献

- 東 潮 1990 「四世紀の国際交流」『古墳時代の工芸』古代史復元 7, 白石太一郎編, 講談社, pp.167-172.
- 東 潮 1992 「対外交流」『図説・日本の人類遺跡』小野昭・春成秀爾・小田静夫編, pp.188-191.
- 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編 2012 『古墳出現と展開の地域相』古墳時代の考古学 第 2 巻, 同成社.
- 岩本 崇 2003 「仿製三角縁神獣鏡の生産とその展開」『史林』第 86 巻第 5 号, pp.1-39.
- 岩本 崇 2005 「三角縁神獣鏡の終焉」『考古学研究』第 51 巻第 4 号, 考古学研究会, pp.48-68.
- 岩本 崇 2008 「三角縁神獣鏡の生産とその展開」『考古学雑誌』第 92 巻第 3 号, pp.1-51.
- 岩本 崇 2010 「三角縁神獣鏡と前方後円墳出現期の社会」『考古学の新天地』菊地徹夫編, 同成社, pp.300-309.
- 岩本 崇 2012 「中村 1 号墳出土珠文鏡と出雲地域の銅鏡出土後期古墳」『中村 1 号墳』出雲市教育委員会, pp.183-196.
- 岩本 崇 2014a 「銅鏡副葬と山陰の後・終末期古墳—文堂古墳出土鏡の年代的・地域的位置の検討—」『兵庫県香美町村岡 文堂古墳』大手前大学史学研究所研究報告第 13 号, 大手前大学史学研究所・香美町教育委員会, pp.135-161.
- 岩本 崇 2014b 「北近畿・山陰における古墳の出現」『博古研究』第 48 号, 博古研究会, pp.1-31.
- 上野祥史 2000 「神獣鏡の作鏡系譜と盛衰」『史林』第 83 巻第 4 号, 史学研究会, pp.30-70.
- 上野祥史 2003 「盤龍鏡の諸系列」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 100 集, 国立歴史民俗博物館, pp.1-23.
- 上野祥史 2004 「韓半島南部出土鏡について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 110 集, 国立歴史民俗博物館, pp.403-433.
- 上野祥史 2007 「3 世紀の神獣鏡生産—画文帯神獣鏡と銘文帯神獣鏡—」『中国考古学』第 7 号, 日本中国考古学会, pp.189-216.
- 上野祥史 2009 「古墳出土鏡の生産と流通」『季刊考古学』第 106 号, 雄山閣, pp.48-51.
- 上野祥史 2011a 「青銅鏡の展開」『古墳時代への胎動』弥生時代の考古学 第 4 巻, 藤尾慎一郎・設楽博己・松木武彦編, 同成社, pp.139-154.
- 上野祥史 2011b 「中国考古学からみた古墳時代」『季刊考古学』第 117 号, 雄山閣, pp.31-35.
- 上野祥史 2012a 「帯金式甲冑と鏡の副葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 173 集, pp.477-498.

- 上野祥史 2012b 「金鈴塚古墳出土鏡と東国の古墳時代後期社会」『金鈴塚古墳研究』創刊号、木更津市郷土博物館金のすず、pp.5-28.
- 上野祥史 2013a 「祇園大塚山古墳の画文帯神獸鏡一同型鏡群と古墳時代中期—」『祇園大塚山古墳と5世紀という時代』上野祥史・国立歴史民俗博物館編、六一書房、pp.107-134.
- 上野祥史 2013b 「中国鏡」『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学 第4巻、一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編、同成社、pp.15-30.
- 上野祥史 2014 「日本列島における中国鏡の分配システムの変革と画期」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集、pp.349-268.
- 上野祥史 2015a 「中期古墳と鏡」『中期古墳とその時代—5世紀の倭王権を考える—』広瀬和雄編、雄山閣、pp.89-98.
- 上野祥史 2015b 「鏡からみた卑弥呼の支配」『卑弥呼—女王創出の現象学—』大阪府立弥生文化博物館、pp.132-141.
- 上野祥史 2015c 「楽浪郡と韓と倭」『狗邪国と古代東アジア』仁済大学校加耶文化研究所・金海市、pp.47-100.
- 上野祥史 2016 「長坂聖天塚古墳の埋葬施設と副葬品」『長坂聖天塚古墳』美里町遺跡発掘調査報告書第25集、埼玉県美里町教育委員会編、pp.79-89.
- 梅原末治 1969 『持田古墳群』宮崎県教育委員会
- 大賀克彦 2005 「稲童古墳群の玉類について—古墳時代中期後半における玉の伝世—」『稲童古墳群—福岡県行橋市稲童所在の稲童古墳群調査報告書—』行橋市文化財調査報告書第32集、行橋市教育委員会、pp.286-297.
- 岡村秀典 1984 「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻第5号
- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集、pp.39-84.
- 岡村秀典 1996 「中国鏡からみた弥生・古墳時代の年代」『考古学と実年代』第1分冊、発表要旨、埋蔵文化財研究会、pp.79-84.
- 岡村秀典 1999 『三角縁神獸鏡の時代』吉川弘文館
- 岡村秀典 2011 「東アジア情勢と古墳文化」『古墳時代 上巻』講座日本の考古学第7巻、広瀬和雄・和田晴吾編、pp.521-551.
- 笠野 毅 1993 「舶載鏡論」『古墳時代の研究』第13巻、雄山閣、pp.172-187.
- 加藤一郎 2014 「後期倭鏡研究序説—旋回式獸像鏡系を中心に—」『古代文化』第66巻第2号、古代学協会、pp.1-20.
- 加藤一郎 2015a 「宮内庁書陵部所蔵の千足古墳および榊山古墳出土鏡の位置づけとその意義」『千足古墳—第1～第4次発掘調査報告書—』岡山市教育委員会編、pp.145-157.
- 加藤一郎 2015b 「宮崎県立西都原考古博物館研究紀要」第11号、宮崎県立西都原考古博物館、pp.15-30.
- 加藤一郎 2015c 「後期倭鏡と三角縁神獸鏡」『日本考古学』第40号、日本考古学協会、pp.53-68.
- 川西宏幸 1975 「銅鐸の埋蔵と鏡の伝世」『考古学雑誌』第61巻第2号、日本考古学会、pp.87-117.
- 川西宏幸 1981 「前期畿内政権論」『史林』第64巻第5号、史学研究会、pp.110-149.
- 川西宏幸 1983 「中期畿内政権論」『考古学雑誌』第69巻第2号、日本考古学会、pp.1-35.
- 川西宏幸 1986 「後期畿内政権論」『考古学雑誌』第71巻第2号、日本考古学会、pp.1-42.
- 川西宏幸 1988 『古墳時代政治史序説』塙書房
- 川西宏幸 1989 「古墳時代前史考—原畿内政権の提唱—」『古文化談叢』21集、九州古文化研究会、pp.1-36.
- 川西宏幸 1991 「仿製鏡再考」『古文化談叢』第24集、九州古文化研究会、pp.93-109.
- 川西宏幸 1992 「同型鏡の諸問題—画文帯重列式神獸鏡」『古文化談叢』第27集、九州古文化研究会、pp.125-140.
- 川西宏幸 1993a 「同型鏡の諸問題—画象鏡・細線式獸帶鏡」『古文化談叢』第29集、九州古文化研究会、pp.55-84.
- 川西宏幸 1993b 「同型鏡の諸問題—画文帯環状乳佛獸鏡」『古文化談叢』第31集、九州古文化研究会、pp.147-166.
- 川西宏幸 2000 「同型鏡を考える—モノからコトへ—」『筑波大学先史学・考古学研究』第11号、筑波大学歴史・人類学系、pp.25-63.
- 川西宏幸 2004 『同型鏡とワカタケル—古墳時代国家論の再構築—』同成社
- 岸本直文 1989 「三角縁神獸鏡製作の工人群」『史林』第72巻第5号、史学研究会、pp.1-43.
- 岸本直文 1995 「三角縁神獸鏡の編年と前期古墳の新古」『展望考古学』考古学研究会40周年記念論集、考古学研究会、pp.109-116.

-
- 岸本直文 2004 「西求女塚鏡群の歴史的意義」『西求女塚古墳調査報告書』神戸市教育委員会, pp.339-348.
- 岸本直文 2010 「倭国の形成と前方後円墳の共有」『史跡で読む日本の歴史』2 古墳時代, 吉川弘文館, pp.14-46.
- 岸本直文 2013 「三角縁神獸鏡と前期古墳」『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学 第4巻, 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編, 同成社, pp.31-42.
- 岸本直文 2014 「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集, pp.369-404.
- 北見一弘・木對和紀・忍澤成視 2015 『市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱ』上総国分寺台遺跡調査報告書XIV, 市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第31集
- 楠元哲夫 1994 「大和天神山古墳出土鏡群の再評価」『橿原考古学研究所論集』第十一集, 吉川弘文館, pp.505-516.
- 車崎正彦 1993 「龍鏡考」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集, 同書刊行会, pp.130-163.
- 車崎正彦 1999 「副葬品の組み合わせ」『前方後円墳の出現』季刊考古学別冊八, 雄山閣, pp.53-74.
- 車崎正彦 2000 「三角縁神獸鏡をめぐる」『栃木県考古学会誌』第21集, 栃木県考古学会, pp.1-35.
- 車崎正彦 2001 「新発見の「青龍三年」銘方格規矩四神鏡と魏晋のいわゆる方格規矩鏡」『考古学雑誌』第86巻第1号, 日本考古学会, pp.69-97.
- 車崎正彦 2002a 「三国鏡・三角縁神獸鏡」『考古学資料大観』第5巻, pp.181-188.
- 車崎正彦 2002b 「六朝鏡」『考古学資料大観』第5巻, pp.201-204.
- 車崎正彦 2008 「三角縁神獸鏡の年代と古墳出現の年代」『史観』第一五九冊, 早稲田大学史学会編, pp.92-112.
- 小林行雄 1952 「同範鏡による古墳の年代の研究」『考古学雑誌』第38巻第3号, pp.1-30.
- 小林行雄 1955 「古墳発生の歴史的意義」『史林』第38巻第1号, 史学研究会, pp.1-20.
- 小林行雄 1956 「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京都大学文学部50周年記念論集』, pp.721-744.
- 小林行雄 1957 「初期大和政権の勢力圏」『史林』第40巻第4号, 史学研究会, pp.1-25.
- 小林行雄 1961 『古墳時代の研究』青木書店
- 小林行雄 1966 「倭の五王の時代」『日本書紀研究』第二冊, pp.131-162.
- 阪口英毅 1998 「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲—変遷とその特質—」『史林』第81巻第5号, 史学研究会, pp.1-39.
- 下垣仁志 2003a 「古墳時代前期倭製鏡の編年」『古文化談叢』第49集, 九州古文化研究会, pp.19-50.
- 下垣仁志 2003b 「古墳時代前期倭製鏡の流通」『古文化談叢』第50集(上), 九州古文化研究会, pp.7-36.
- 下垣仁志 2004 「玉手山古墳群の鏡」『玉手山古墳群の研究』IV副葬品篇, 柏原市教育委員会, pp.64-90.
- 下垣仁志 2005a 「倭王権と文物・祭式の流通」『国家形成の比較研究』前川和也・岡村秀典編, 学生社, pp.76-98.
- 下垣仁志 2005b 「連作鏡考」『泉屋博古館紀要』第二十一巻, pp.15-35.
- 下垣仁志 2010 『三角縁神獸鏡研究事典』吉川弘文館
- 下垣仁志 2011 『古墳時代王権構造の研究』吉川弘文館
- 下垣仁志 2012a 「古墳時代首長墓系譜論の系譜」『考古学研究』第59巻第2号, 考古学研究会, pp.56-70.
- 下垣仁志 2012b 「銅鏡授受の意義」『考古学ジャーナル』No.635, ニューサイエンス社, pp.10-14.
- 下垣仁志 2013a 「青銅器から見た古墳時代成立過程」『新資料で問う古墳時代成立過程とその意義』考古学研究会関西例会30周年記念シンポジウム発表要旨集, pp.34-45.
- 下垣仁志 2013b 「鏡の保有と「首長墓系譜」」『立命館大学考古学論集』VI, 和田晴吾先生定年退職記念論集, pp.189-202.
- 白石太一郎・設楽博己編 1994 「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集
- 白石太一郎・設楽博己編 2002 「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第97集, pp.47-122.
- 杉井健・上野祥史編 2012 『マロ塚古墳出土品を中心とした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集
- 鈴木一有 2011 「松林山古墳と遠江の前方後円墳」『黄金の世紀』豊橋市美術博物館・飯田市美術博物館, pp.123-134.
- 高橋 徹 1986 「伝世鏡と副葬鏡」『九州考古学』60, 九州考古学会, pp.53-60.
- 高松雅文 2011 「三重県の鏡(1) —同型鏡群—」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第20号, pp.51-64.
- 田中晋作 1993 「百舌鳥・古市古墳群成立の要件—キャスティングボートを握った古墳被葬者たち—」『考古学論叢』関西大学考古学研究室開設四拾周年記念, pp.187-213.
-

- 田中晋作 2001『古市・百舌鳥古墳群の研究』学生社
- 田中晋作 2005「畿内およびその周辺地域における有力勢力の動態」『古代武器研究』第6号, 古代武器研究会, pp.32-46.
- 田中晋作 2008「三角縁神獸鏡の伝世について—畿内およびその周辺地域の有力勢力の動態—」『古代学研究』第180号, pp.157-164.
- 田中晋作 2010『筒形銅器と政権交替』学生社
- 田中晋作 2012「猪名川流域に投影された政権中枢勢力の動静」『菟原Ⅱ』森岡秀人さん還暦記念論文集, pp.343-360.
- 田中晋作 2013「京都府桂川右岸地域に投影された政権中枢勢力の動静」『橿原考古学研究所論集』第16, 奈良県立橿原考古学研究所創立75周年, pp.68-76.
- 辻田淳一郎 1999「古墳時代前期倭鏡の多様性とその志向性」『九州考古学』第74号, 九州考古学会, pp.1-17.
- 辻田淳一郎 2000「龍鏡の生成・変容過程に関する再検討」『考古学研究』第46巻第4号, 考古学研究会, pp.55-75.
- 辻田淳一郎 2001「古墳時代開始期における中国鏡の流通形態とその画期」『古文化談叢』第46集, 九州古文化研究会, pp.53-91.
- 辻田淳一郎 2005「破鏡の伝世と副葬—穿孔事例の観察から—」『史淵』九州大学大学院人文科学研究院, 第142輯, pp.1-39.
- 辻田淳一郎 2006「威信財システムの成立・変容とアイデンティティ」『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ—』田中良之・川本芳昭編, pp.31-64.
- 辻田淳一郎 2007a「古墳時代前期における鏡の副葬と伝世の論理—北部九州地域を対象として—」『史淵』第144輯, 九州大学大学院文学研究院, pp.1-33.
- 辻田淳一郎 2007b『鏡と初期ヤマト政権』すいれん舎
- 辻田淳一郎 2008「三角縁盤龍鏡の系譜」『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集—』pp.295-315.
- 辻田淳一郎 2009「久里双水古墳出土盤龍鏡の諸問題」『久里双水古墳』唐津市文化財調査報告書第957集, pp.107-124.
- 辻田淳一郎 2012a「鏡」『古墳時代研究の現状と課題(下)—社会・政治構造及び生産流通研究—』土生田純之・亀田修一編, 同成社, pp.151-174.
- 辻田淳一郎 2012b「倭製鏡と中国鏡—モデルとその選択—」『考古学ジャーナル』No.635, ニューサイエンス社, pp.15-19.
- 辻田淳一郎 2012c「九州出土の中国鏡と対外交渉—同型鏡群を中心に—」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会北九州大会資料集, pp.75-88.
- 辻田淳一郎 2012d「雄略朝から磐井の乱に至る諸変動」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会 研究発表資料集』日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会, 高倉洋彰・三阪一徳編, pp.489-498.
- 辻田淳一郎 2013「古墳時代中期における同型鏡群の系譜と製作技術」『史淵』第150輯, 九州大学大学院人文科学研究院, pp.55-93.
- 辻田淳一郎 2014a「建武五年銘画文帯神獸鏡の文様と製作技術」『東アジア古文化論攷』上巻, 高倉洋彰編, 高倉洋彰先生退職記念論集刊行会, pp.177-196.
- 辻田淳一郎 2014b「鏡からみた古墳時代の地域間関係とその変遷—九州出土資料を中心として—」『古墳時代の地域間交流』2, 第17回九州前方後円墳研究会 大分大会発表資料・要旨集, pp.1-26.
- 辻田淳一郎 2015「同型鏡群の鈕孔製作技術—画文帯環状乳神獸鏡Aを中心に—」『史淵』第152輯, 九州大学大学院人文科学研究院, pp.31-50.
- 新納 泉 1991「権現山鏡式群の型式学的位置」『権現山五一号墳』
- 西村俊範 1983「双頭龍文鏡(位至三公鏡)の系譜」『史林』第66巻第1号, 史学研究会, pp.95-115.
- 林 正憲 2000「古墳時代前期における倭鏡の製作」『考古学雑誌』第85巻第4号
- 林 正憲 2002「古墳時代前期倭鏡における2つの鏡群」『考古学研究』第49巻第2号, 考古学研究会, pp.88-107.
- 橋本達也 2005「古墳時代中期甲冑の出現と中期開始論—松林山古墳と津堂城山古墳から—」『待兼山論叢—都出比呂志先生退任記念』大阪大学考古学研究室, pp.539-556.
- 橋本達也・中野和浩 2016「宮崎県えびの市島内139号式横穴墓の発掘調査概要」『日本考古学』第42号, 日本考古

- 学協会, pp.99-109.
- 樋口隆康 1960「画文帯神獸鏡と古墳文化」『史林』第43巻第4号, 史学研究会, pp.40-58.
- 広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編, pp.24-36.
- 広瀬和雄・和田晴吾編 2011『古墳時代 上巻』講座日本の考古学 第7巻, 青木書店
- 福永伸哉 1994「仿製三角縁神獸鏡の編年と製作背景」『考古学研究』第41巻第4号, 考古学研究会, pp.47-72.
- 福永伸哉 1996「舶載三角縁神獸鏡の製作年代」『待兼山論叢』30, pp.1-22.
- 福永伸哉 1998「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格」『青丘学術論叢』30
- 福永伸哉 1999a「古墳時代前期における神獸鏡製作の管理」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』pp.263-289.
- 福永伸哉 1999b「古墳時代の出現と中央政権の儀礼管理」『考古学研究』第46巻第2号, pp.53-72.
- 福永伸哉 2001『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学出版会
- 福永伸哉 2005a『三角縁神獸鏡の研究』大阪大学出版会
- 福永伸哉 2005b「三角縁神獸鏡と画文帯神獸鏡のはざままで」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室編, pp.469-484.
- 福永伸哉 2005c「いわゆる継体期における威信財変化とその意義」『井の内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学報告第3冊, 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団編, pp.515-524.
- 福永伸哉 2007「継体王朝と韓半島の前方後円墳—勝福寺古墳築造期の時代背景をめぐって—」『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学報告第4冊, 寺前直人・福永伸哉編, pp.425-434.
- 福永伸哉 2008a「青銅鏡の政治性萌芽」『儀礼と権力』弥生時代の考古学7, 同成社, pp.112-126.
- 福永伸哉 2008b「前方後円墳成立期の大和川と淀川」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』(平成17年度～19年度科学研究費補助金(基盤研究(A)研究成果報告書) 研究代表者白石太一郎), 六一書房, pp.439-450.
- 福永伸哉 2011「考古学からみた継体政権」『三島と古代淀川水運Ⅱ—今城塚古墳の時代—』高槻市立今城塚古代歴史館
- 松浦有一郎 1994「日本出土の方格T字文鏡」『東京国立博物館紀要』第29号, pp.177-254.
- 森 浩一 1962「日本の古代文化—古墳文化の成立と発展の諸問題—」『古代史講座』3, 石母田正・泉靖一・井上光貞・太田秀雄・西嶋定生・秀村欣二・三笠宮崇仁・三上次男・和島誠一編, 学生社, pp.197-226.
- 森 浩一 1978「日本の遺跡と銅鏡—遺構での共存関係を中心に—」『鏡』日本古代文化の探究, 社会思想社, pp.53-95.
- 森下章司 1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第76巻第4号, 史学研究会, pp.1-43.
- 森下章司 1998a「鏡の伝世」『史林』第81巻第4号, 史学研究会, pp.1-34.
- 森下章司 1998b「古墳時代前期の年代試論」『古代』105号, 早稲田大学考古学会, pp.1-28.
- 森下章司 2002「古墳時代倭鏡」『弥生時代・古墳時代 鏡』考古学資料大観 第5巻, 小学館, pp.305-316.
- 森下章司 2005a「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』第89巻第1号, 日本考古学会, pp.1-31.
- 森下章司 2005b「器物の生産・授受・保有形態と王権」『国家形成の比較研究』前川和也・岡村秀典編, 学生社, pp.179-194.
- 森下章司 2011「鏡」『古墳時代 下巻』講座日本の考古学第8巻, 広瀬和雄・和田晴吾編, pp.454-477.
- 和田晴吾 1986「金属器の生産と流通」『生産と流通』岩波講座 日本考古学第3巻, 岩波書店, pp.264-303.
- 和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号, 考古学研究会, pp.44-56.
- 和田晴吾 1992「群集墳と終末期古墳」『近畿Ⅰ』新版古代の日本 5, 角川書店, pp.325-350.

[図出典]

図5の各画像については、東京国立博物館所蔵品(2,3,5)及び奈良県立橿原考古学研究所所蔵品(4)は奈良県立橿原考古学研究所より画像の提供を受け、宮内庁書陵部所蔵品(1)については下記文献より転載した。

奈良県立橿原考古学研究所編 2005『三次元デジタル・アーカイブを活用した古鏡の総合的研究』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第8冊, 明新社

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2017年3月23日受付, 2017年7月31日審査終了)

Distribution and Possession of Mirrors in the Kofun Period

UENO Yoshifumi

Mirrors buried as grave goods in the Kofun period are one of the most important pieces of evidence that elucidates the political structure of the Kofun society.

There was often a large time gap between the production/acquisition and burial of mirrors. Depending on the interpretation, such mirrors possessed over a long period of time may have a large impact on discussions on political relationships and social structures. The influence is even more significant in the case of Chinese mirrors as the time gap between their production and burial was very large. This article aims to establish a process to determine when mirrors were distributed and develop a simulation model applicable to both Chinese and Japanese mirrors and consistent with the time of production and burial.

First, Chinese and Japanese mirrors buried in mounds are divided into four periods of time according to the mirror-based chronology. Then, the processes of determining the time of distribution are compared to one another. This analysis reconfirms the significance of dating the burial of grave goods and suggests a simulation model in which the time of distribution is determined mainly based on the time of production/acquisition but also based on the assumption that some mirrors were distributed over a long period of time.

This simulation model is examined from two points of view: (1) the analysis of relationships between the emergence of Japanese mirrors and the possession of Chinese mirrors and (2) the comparison of transitions in Chinese and Japanese mirrors of the same style buried as grave goods. The results show that we can determine the time of acquisition and distribution of Chinese mirrors by analyzing which types of Chinese mirrors were imitated. The relationships between Chinese and Japanese mirrors of the same style are compared to one another. The analysis of curved dragon mirrors indicates that Chinese and Japanese mirrors complemented each other and were used as grave goods over a long period of time.

This study examines the simulation model based on the assumption that most mirrors were distributed just after production/acquisition but some were distributed long after production/acquisition. This article also highlights that distributors kept mirrors over a long period of time, not only because they wanted to continue distributing mirrors but also essentially because distribution

was transformed into shared possession (i.e. distributors kept some mirrors while distributing the rest to others). Because it is presumed that mirrors were distributed over a long period of time, this article examines the dynamics of political order based on the distribution theory from the viewpoint of continuity.

Key words: Mirror, possession over a long period of time, distribution, shared possession, Chinese mirror, Japanese mirror